

北の方の長くつらなる岬と岬を

We past long lines of Northern capes

また遠く北の方の緑野もよぎり

And dewy Northern meadows green.

(この川に波をたて入る)

We came to warmer waves, and deep

果てしなく東の海をはるかにも走り渡り

Across the boundless east we drove,

彼の岸に波をたて砕く浪の

Where those long swells of breaker sweep

ニクタンクの庄へる岩根と丁子生へる島が根を洗ふ(東の海を)

The nutmeg rocks and isles of clove.

船やうやく進みて北洋に入る、季候と風色と見る／＼變化す。峯多くある小島の船の位置と共に姿をあらたむる、見るやうなり。

▲「岡のへの高き里のちぼろげに見らるゝは、船やゝ濱に近ければなるべし。▲「高き里」といへるは岡の上にある里なれば也。▲さて北方の海岸に沿うて次第々々

に進航し、船は既に温帯海に入りぬ、肉豆蔻を産する島及び丁子の産する島は、いづれも東洋の島々なり。例へば、モリツカ群島の如き、フィリッピン群島の如き、是れなり。▲deep「深く」又は「はるか」の意。

其の六

VI

火の煙の塔々の丘とて

又は

またく打鐘りて

By peaks that flamed, or, all in shade,

火の煙の塔々の丘とて 鐘の響のよるを 鐘の響のよるを(茶々の丘とて)

Gloom'd the low coast and quivering brine

その丘の煙に散らるる波

With ashy rains, that spreading made

その丘の煙のよるを 鐘の響のよるを(茶々の丘とて)

Fantastic plume or sable pine;

(その丘に) 鐘の響のよるを(その丘に) 鐘の響のよるを(茶々の丘とて)

By sands and steaming flats, and floods

その丘の煙のよるを

我が船の時ど口と波を河原のはらな我が船すむやかに飛ぶんぐれは
Of mighty mouth, we scudded fast,

紅花咲きたる森の小山や

And hills and scarlet-mingled woods

我が船の飛びゆくはこしに

Glow'd for a moment as we past.

此の一節はむむと南洋の風景を叙したり。▲「火の燃ゆる峯々」とは噴火山也。▲「打曇りて灰の雨ふらせ云々」は噴火山の奇現象なり、灰雨の中天に舞ひ廣がりて、或は大なる羽根飾の如く見え、或は墨繪の松杉の如く見ゆる山は、彼なたの航海記に往々詳叙せる所なり。▲「ふるふ沖」とは、灰の雨に撲たれて浪の揺動するさまをいへる也、浪の荒るゝを形容して「鞭もて打たれたる海」などいふこと彼なたの詩文には屢々見る例なり。▲「湯氣たちのぼる平地」とあるも熱帯地方の殊なる現象を描ける也。▲「紅花咲きまじる森」の、岸に沿うて船の疾行するはしに、ちら／＼と目に映する、さもありげなり。

其の七

VII.

おはむ知らむ風土のたれを思ふ
O hundred shores of happy climes,

目こぼすは母は我が親なる島に近づくに
How swiftly stream'd ye by the bark!

おの世に海を渡る旅々たつた
At times the whole sea burn'd, at times

世の世に火を焚く
With wakes of the fire we tore the dark;

おの世に海を渡る旅々たつた
At times a carven craft would shoot

世の世に海を渡る旅々たつた
From havens hid in fairy bowers,

赤探々の脚や脚や花はたつたのたれを思ふ
With naked limbs and flowers and fruits,

タヒチ島の小島

さもあらばあれ 我がともがらは船なとめしことぞなき花見もくたもの見ると
But we nor paused for fruit nor flowers.

こゝに住まば楽しからんと、流石に心も目も牽かるゝ浦は、幾ばくといふ數を知らず、志かるを仇にのみ見すとし、船は矢の如く疾行す。最初の二句は、流石に未練の残れば後にせし津々浦々を追懐し、汝等云々と呼びかけたるなり。按ふに、理想を追ふものはかりそめにも中道に停まるべきにあらざ、現在の幸福は、所詮理想上の淨樂に易へがたし。疾行する船は向、上、無限の、淨、願、を代表し、風土めてたき津々浦々は現世間の、利、福、を代表す。

さて更に勇を鼓してますく、船を進むる程に、或時は燐火海に満ちて、浪悉く青白きことあり、或はそを乗り切りて、まりへに炎々たる船跡を残すこともあり、共に南洋に於ける特殊の壯觀なり。また或る時は、突爾として南海島に棲める裸躰の戀人、野花果實等を獨木舟に積み載せて、近づき來たれる外國船をみとめて、商せんとす。其の花美なりと雖も、其の果うまげなりと雖も、船中の者一人として之れが爲に精進の本願を忘れしものなし、一意前進せんとするのみ、曾て船を停めしことなし。

夜海上三舟
やんば、いぼや
フ以テ船跡を
にるし並多し
目録

し。▲物えられる獨木舟とは獨木舟の外面を種々に彫刻して飾りたるをいふ。

其の八
VIII.

何となれば一個の美なる影の繁華として毎に走ればなり

For one fair vision ever fled

茫々たる水のあなたく

夜々

Down the waste waters day and night,

あなたく我々を照らすあやみの影の繁華

And still we follow'd where she led,

導くも後には追らざりしをぞ願ふ

In hope to gain upon her flight,

彼こそ面影のついでに

Her face was evermore unseen,

はるなる海峯のやうに

And fixt upon the far sea-line;

カニマンの物語

さばれ人昔のひそかにいらく あはれ我が女大君

But each man murmur'd, 'O my Queen,

我れは汝れに追随せむ 我がものごとくむまひ

I follow till I make thee mine.'

現在の利福をも棄て、只管に船を進むるは何故ぞ、といふに、他なし、我がさしてゆく浪のあなたに嬋妍たる一個の神女の髣髴として影を現し、船にさきだちて走ればなり。こゝに謂ふ神女の幻影とは何ぞ。朦朧たる理想の影をいふ也。人々は其の心の目に此の美しき幻影を見るが故に、片時も現在にのみ執着せん、の心はなく、晝夜休息せずして精進する也、いつかは彼れに追いつきて宿望を達したしと念願すればなり。されど此の理想の影は、常に毎におぼろげなるゆゑ、未だ一人だに明白には理想の本相を認め得たる者なし、理想の面はとこしなへに未來に向かひ、とこしなへに前のかたに向かへり。其の確定不動の本相は哲士も未だ明説する能はず、天才も未だ詳状する能はず。さもあれ衆皆ひそやかに獨語すらく、「あはれ、我が佛、我が本尊、たとへ汝れが本相は明かならずとも、我れは汝があとを尾ひゆか

む、竟に汝れを捉らへ得て我が有となさむまでと。すなはち世の海を渡らむ者にして、苟くも理想を實現せむことを期せざるものはなしいふ意。

▲「海線の上に」とは「水平線上に」の義、前釋によりて其の義をさとるべし。

其の九 IX.

わづ其の影は或時は見えなかり又或時はをらちけり

And now we lost her, now she gleam'd

余色の海より成なるをばいづるのふらふ

Like Fancy made of golden air,

或時は無常の空の如く

Now nearer to the prow she seem'd

忽ちたる空のふらふ 舟の先頭の方なり

Like Virtue firm, like Knowledge fair,

或時は徳に堅く又或時は智の如く(徳と智と)

Now high on waves that idly burst

今ニ浪の吹

天正界の理想のやうに海原の飾となし

Like Heavenly Hope she crown'd the sea,

また或時は

血の刃を逆じり

And now, the bloodless point reversed

眞自由の刃を掲げ

She bore the blade of Liberty.

此の段は理想の變幻無窮なるを説けり。或時は理想全く消盡して人々其の影を認め得ざることあり、或時は其の影燦として金色の光明を放ち、人々の心眼に照り輝き、えも言はず尊くは拜まがまるれど、而も何物とも名狀しがたきことあり。或時は又目ま近く現れ、一舉せば實現し得らるべきが如く思はるゝことあり。或時は理想の本體は、或哲學者の唱へたるが如く、毅然たる圓滿の淑徳に外ならじとも見え、又或時は如々たる正智に外ならじとも見ゆ。又或時は無常有漏の浮世の浪間に逆風怒濤を恐るゝ色なく、泰然として高々と妙なる姿を現すを見れば所謂理想とは現世に實現すべきものといはんよりは、未來世すなはち天上界に對する人間の信仰希望ともいふべく、此の苦海を渡る唯一の舟筏なるが如し。又或時は理想の風

姿一變し、譬へば手に一利劍を掲げて立てる。一個の女神とも見ゆ。此の利劍は圓滿なる眞自由を獲る利劍なり、但し其の鋭尖きつなは地の方へ向かひ、且つ其の刃邊には些の血斑だにも無し。按ずるに、テニソンは温和なる改進黨を奉じ、痛く過激の改革を惡めり、故に刃に働らずして自由を獲るをもて理想とせる也。▲ Knowledge fair の fair を美しきといふ義に釋したるもあり、いかにや。按ふに、美德の毅然たるものに對して「正智」といはん程の心に用ひたるにはあらぬか。fair には「公正」といふ義あり、「偏せざる局せざる正智」ところには釋しし。

其の十

X.

わし我が群のうらにのみひとり

彼をば

And only one among us——him

我々の群のうらにのみひとり

彼をば

We pleased not——he was seldom pleased:

テニソンの小説

又々にもあしたにも錨をささしんとなし

Nor anchor dropt at eve or morn;

ついで世の光榮は我々もあつていふ

We lov'd the glories of the world,

所謂天然の制裁は我々は常にさげすみたり

But laws of nature were our scorn.

何となれば暴風は吹き起り吹き荒れまて後に吹を歇せり

For blasts would rise and rave and cease,

それと邪惑より來つる 船を驅る彼の物は

But whence were those that drove the sail

ついで風の極なる中心を横切り

Across the whirlwind's heart of peace,

剩く逆風に向ら且つて帆を貫きて(船を驅る彼の物は)

And to and thro' the counter gale?

現世間に如何なる變あるも理想を追ふ船は停まることなし。我が黨は當來に希望を屬すること甚深なればなり。かくいへば人或は言はん、汝等は現世を愛せざる

か、ひとへに出世間を道なりとせるかと。否、我が黨は現世を度外視する者にあらざ、現世の光榮を認むることにて於ては、我々豈人後にあちんや、現世を愛することにて於ては我々豈餘人に劣らんや。只謂ふ所の俗人は、只管現在に執着し自然の進化をのみ是れ法とし、天の爲す所は人一毫も之れに加ふるの力無しとなす。彼等の天法を重ずるや、人間の進化をひとへに自然作用に一任せんとす、彼等は自然法の狂ぐべからざるを唱へて竟に人間を偶人視する也。我が黨は然らず、深く人爲の重ずべきを信ずるが故に、理想の追求をもて人間の爲さるべからざる大なる務となし、隨うて彼等が唱ふるが如き制限を卑しむ。何が故に然るか。答へて曰はく、現世の事業には障魔多し、譬へば暴風の吹き起り、吹き荒れて、船の進行をとむるが如し、吹き起るも偶然、吹き歇むも偶然、現世の障害は殆ど豫め期すべからざるものなり。されどかゝる障礙あるに拘らず、船の能く行くは何故ぞ。尤も怖ろしき旋風の中心をも横切り、逆風にもさかひ、颶風をも貫き、能く其のさすかたへ向ふは如何。何物が船を驅るぞ。逆風は帆にさかへる也、而も船の進むは如何。是れ豈靈妙なる人心の作用に囚らざらんや。船を進むる、蓋し人間の偉力にあらざるや、

若し偶然と自然とのみに依頼せば、嚴密にいへば、一段も船を進むるの機無からん。偶然及び自然の障魔は、突然として來たり、又卒然として去る、必しも恐るゝに及ばず、また決して頼むに足らず。

▲「帆を驅る」(drove the sail)と原詞にあるは「風は帆に逆へるに、何物が帆を驅るぞ」の意なり。▲「されど那邊より來つる云々」は「何物に由來せる」の義也。▲旋風の穩かなる中心」とは、旋風の周邊は近づき難きほど風浪の荒ること激しきものなれど、其の中心は却りて平穩なりといふ意、こは理學家の唱ふる所なり、されど此の中心に入らば、恐らく出づること叶ひがたかるべく、最も怖ろしき境涯なり。此の段の解釋はマクミラン版の釋をも参照せしが、心得がたきふし多ければ、こゝには専ら予が見る所によりて解を下せり、疑ふらくは、彼の釋はテニソンの本意とはたがふるにはあらじか。

其の十二

XII

又我がとちちは寒帯の多路に來りぬ

Again to colder climes we came,

彼處の寒へたへん、たぐに無慮のなり

For still we follow'd where she led:

今も無慮は田まひたり

船長はまじだくたつ

Now mate is blind and captain lame,

又舟子等もなほは病み又は死に

And half the crew are sick or dead,

又半は病つたも死つたも病つたも

But, blind or lame or sick or sound

我ら病は病、盲は盲、其の物に

We follow that which lies before:

彼處の寒へたへん、たぐに無慮のなり

We know the merry world is round,

我ら我らにのさけはなれぬ

And we may sail for evermore.

ホニマンの心づ

無限向上の船旅ははてしなく、船は再び寒帯の海に入りぬ。巨山の如き氷塊に船
 幾たびも危く、肌を劈く寒風に耳鼻ごとく腐り爛る。遮莫いかなる艱苦に遭
 ふも、我が黨は宿願を絶つ能はず。今や我が黨の木鐸たりし者も、多年の艱難に身
 神共に疲憊し、同志はたな加は枯槁せり、されば我が黨の素志は奪ふべからず、尙
 も理想の片影を追ひ、百難を排除して精進の勇を鼓す。何となれば無限進歩の確
 信は、依然として抜くべからざればなり。

以上此の一篇にあらはれたる觀念は、作者が確信せし所有名なる『イムメモリヤム』
 以後の作には此の觀念常に見えたり。蓋し此の『船たび』はテニソンの觀念と理想
 とを窺ふには、頗る便宜なる作なり、こゝに之れを評釋せしも、早う我が國の讀者に
 此の作者の片影を知らせんとて也。

前には脱き洩らし、が、此の作の律格は昂起格にて、四歩を一行とし、始終同一の律
 格也。

ドラ女物語

Dora.

上に訓釋せる二篇は、テニソンの作のうちにて隱微の寓意に富み、ひとへに表面の
 みを讀みては十分の旨味を悟りがたきたぐひなるが、下に物する『ドラ女』が物語
 は、素樸淡雅の好小話、その味ひは釋を俟たずして知らるべし、妙は理窟の上にお
 ずして人情の上におり、殊にドラ女の如きは此の作者が得意の人物、温順貞良の種
 化とも評すべし。ドラといふ名、我が國にては聞き苦しけれど、彼なたにてはいと
 可憐なる名とせり、美代、千代などいふ名と同じ程によろこばるゝ少女の名と知
 るべし。

此の小話はもとメーリリー、ロッセル、ミットフォード女といふ女作家の作『我が村』といふ
 小話集中に見えたるを、其の筋の大むねだけを借り來て更に新工夫を加へたるも
 のなり。風調のいと美しうして、辭の簡樸雅馴なるところ、尤も翫味すべし。

農夫フランと共に

暖の屋に

With farmer Allan at the farm abode

テニソンの小話

カマキヤトドムル

カマキヤトドムル

William and Dora. William was his son,

カマキヤトドムル 彼が父に似てゐるから

And she his niece. He often look'd at them,

カマキヤトドムル 「彼が彼等をよく見てゐた

And often thought, 'I'll make them man and wife'.

カマキヤトドムル

Now Dora felt her uncle's will in all,

カマキヤトドムル されど彼の若人は

And yearn'd towards William; but the youth, because

カマキヤトドムル

He had been always with her in the house,

カマキヤトドムル

Thought not of Dora.

▲「まづ／＼二人をななめて」みぢはしき一對よと打ながめての意。▲叔父が思へるものを「だ々」in all は「悉く」の義にてこゝは「悉く叔父の意に同じ」といはんほど

の意也。▲同じ家に在りし故に「我が同胞のやうに思ひ做して行末妻とすべからむ」とは思はちとなり。

カマキヤトドムル

Then there came a day

カマキヤトドムル

When Allan called his son, and said, My son:

カマキヤトドムル 民衆へはさす

I married late, but I would wish to see

カマキヤトドムル 彼を嫁がぬ前に

My grandchild on my knees before I die:

カマキヤトドムル

And I have set my heart upon a match.

カマキヤトドムル

Now therefore look to Dora; she is well

カマキヤトドムル

To look to; thrifty too beyond her age.

カマキヤトドムル

彼女は我が弟の女なり

彼と我と

She is my brother's daughter: he and I

なるは同胞の妹なり

わが妹は彼と我

Had once hard words, and parted, and he died

外國にて

わが兄弟は遠くを去りて

In foreign lands; but for his sake I bred

彼の故郷にて

彼を養ふに努むるは我の志なり

His daughter Dora: take her for your wife;

彼を我が妻と爲さむ

其の女なり

For I have wish'd this marriage, night and day.

其の多しかりし年

わが心は夜も日も此の嫁を思ふ

For many years.' But William answer'd short;

但 William answer'd short;

「彼を娶ふべしと願ふは

余の志なり

'I cannot marry Dora; by my life,

彼を娶ふべしと願ふは

わが命は此の誓なり

I will not marry Dora.'

Then the old man

~~~~~

彼は其の怒りて云ふ

Was wroth, and doubled-up his hands, and said:

「是れ多しかりし年

彼は其の怒りて云ふ

'You will not, boy! you dare to answer thus!

眼を赤くし我が妹を思ふは

But in my time a father's word was law,

わが時を我が父の言はば

わが言はば

And so it shall be now for me.

Look to it;

余は之を承けん

1 氏は之を承けん

Consider, William: take-a-month to think,

余は之を承けん

And let me have an answer to my wish;

余は之を承けん

Or, by the Lord that made me, you shall pack,

是れは我が妹を思ふは

And never more darken my doors again.'

トウィリアムの答



▲ Look to Dora はほい本文に訓じたる意、其の次の Look to は「打ながむる」の意。  
 ▲ Brother は兄とも弟ともわきがたけれど、物語の筋を案じ、Dora のウィルヤムより年下なるを思へば、弟と訓ずるが妥なるべし。▲ 命かけては「誓うて」の義。  
 ウィルヤムが妹愛せりし Dora を妻とせよといはれて、案外を感じ、「滅相な」と思へるまゝをに、べなくいひあらはし、端なくも父子の仲たがひを醸せるは、是非も無き行きらがひ也。一方は一圖に思ひ込める老人かたぎ、一方は思ひやり無き少年かゝる譯もなき行ちがひが元にて浮世の悲劇は演ぜらるゝなり。▲ 「兎まれ」云々、but をかゝる場合に用ふること間々あり、悉しくは「汝の意はとまれかくまれ」の義。▲ 「我が若き頃には」云々、當今は知らず、我が若きころには父の命、法律同然にて背き悖らざるを孝子の本分とせり、我れはた其の子に對しては專制君主的權力を有すべき筈なり、若し我が命に背かば、一日も此の家に住ますまじきぞ、汝それ之れを思へ」の意。▲ 一度はいたく怒りながら、また言葉を重ねて反省せよと諭すさま、親心見えていとめてたし。▲ 「速に旅装すべき也」とは「速に此の家を立去るべき也」の意。  
 ▲ 「我が家の戸口を昏うせざるべきなり」とは「汝の面を見れば我が家爲に昏うなる

心地すくはしくさへば不快の影を生ず、また來たる勿れの義。

But William answer'd madly; bit his lips,  
 And broke away. The more he look'd at her  
 The less he lik'd her; and his ways were harsh;  
 But Dora bore them meekly. Then before  
 The month was out he left his father's house,  
 And hired himself to work within the fields;  
 And half in love, half spite, he woo'd and wed







But Dora stored what little she could save,

And sent it them by stealth, nor did they know

Who sent it; till at last a fever seized

On William, and in harvest time he died.

But Dora stored what little she could save,  
And sent it them by stealth, nor did they know  
Who sent it; till at last a fever seized  
On William, and in harvest time he died.

Then Dora went to Mary. Mary sat

And look'd with tears upon her boy, and thought  
Hard things of Dora. Dora came and said:

'I have obey'd my mole until now,  
And I have sinn'd, for it was all thro' me

This evil came on William at the first.  
But, Mary, for the sake of him that's gone,

And for your sake, the woman that he chose,  
And for this orphan, I am come to you:

You know there has not been for these five years

So full a harvest: let me take the boy,

So full a harvest: let me take the boy,







But her heart fail'd her; and the reapers reap'd,  
 And the sun fell, and all the land was dark.

▲種まかてありし圃の土とは「麥の生へておらぬ圃すなはち遠方よりもよく見らるべきところ也。」に彼の孤見をすわらせて片意地なる叔父の目に觸れしめんとする也。▲彼の農翁とは「フランをいふ。」▲「粟あまた生へりし」云々、かゝる淡墨畫の間に此の一點紅作者が點彩の巧なるを味をへし。▲her heart「勇氣を落す」とは「ん程の義。▲「る程に麥刈る男等」云々、このandは「かゝりければ又は」なはちなごの義に近し故に其の次行なるはすべて「やがて」と訓じし。▲all the landは恰も「四面」の義也。

But when the morrow came, she rose and took  
 The child once more, and sat upon the mound;

And made a little wreath of all the flowers  
 That grow about, and tied it round his hat  
 To make him pleasing in her uncle's eye.

Then when the farmer pass'd into the field  
 He spied her, and he left his men at work,  
 And came and said: 'Where were you yesterday?  
 Whose child is that? What are you doing here?'

▲Pleasing「目易う」愛らしうの義。▲「アラ女が優美なる工夫はたちまち此の一段をして一幅の好畫圖と成らしむ」白頭の老農可憐なる淡裝の田舎乙女花鬘をいた



うつる紅顔の稚兒綠樹黃婆、山近水正は是れ圓山派得海の好田家山水。

ソレハトシカニシテ

So Dora cast her eyes upon the ground,

オノオノトシテ

「ウィリアムの子は誰か」

And answer'd softly, 'This is William's child!'

「オノオノトシテ」 トシテ云フカ 「オノオノトシテ」

'And did I not,' said Allan, 'did I not

(ウリアム)トシテ

トシテ云フカ

Forbid you, Dora?' Dora said again:

「オノオノトシテ、ウリアムの子は誰か、オノオノトシテ」

'Do with me as you will, but take the child,

オノオノトシテオノオノトシテ云フカ

And bless him for the sake of him that's gone!

オノオノトシテ云フカ

「オノオノトシテ」

And Allan said, 'I see it is a trick

オノオノトシテオノオノトシテ云フカ(オノオノトシテ)

Got up betwixt you and the woman there.

オノオノトシテオノオノトシテ云フカ オノオノトシテ云フカ

I must be taught my duty, and by you!

オノオノトシテオノオノトシテ云フカ

オノオノトシテ云フカ

You knew my word was law, and yet you dared

オノオノトシテ オノオノトシテ云フカ

To slight it. Well—for I will take the boy;

オノオノトシテ云フカ

オノオノトシテ云フカ

But go you hence, and never see me more.'

▲我れ我がすべきことヲ云フカ「白頭翁たる我れ、オノオノトシテ云フカオノオノトシテ云フカ」

んや、汝等の指圖を受くるとは奇怪也の意。かた意地ぢやぢの性よく見えたり。

▲Wellは「オノオノトシテ」云フカ程の意也。オノオノトシテ云フカ「オノオノトシテ」云フカ

よからん其の小僧は我れ將てゆくべければの義。

オノオノトシテ云フカオノオノトシテ云フカ

So saying, he took the boy that cried aloud

オノオノトシテ云フカ

二二四



5220 5221 (5222) 5223 5224 5225 5226 5227  
 And struggled hard. The wreath of flowers fell  
 花冠は地に落ち 花冠は地に落ち  
 At Dora's feet. She bow'd upon her hands,  
 Doraの足に 膝を地に打ち 膝を地に打ち  
 And the boy's cry came to her from the field,  
 少年の叫びが 田舎から来た 少年の叫びが来た  
 More and more distant. She bow'd down her head  
 ますます遠く 頭を下げて 頭を下げて  
 Remembering the day when first she came,  
 思い出して 来た日 来た日  
 And all the things that had been. She bow'd down  
 思い出して 出来たこと 出来たこと  
 And wept in secret; and the reapers reap'd,  
 涙をこぼして 刈り手が刈る 刈り手が刈る  
 And the sun fell, and all the land was dark.

▲「手の上は伏す」とは我れ手の上に顔伏せて打泣くの意也。▲此の段の趣致は通

童女の身の上の出来事

5228 5229 5230 5231 5232 5233 5234 5235 5236 5237  
 Then Dora went to the Mary's house and stood  
 童女はマリアの家に 行って 立って  
 5238 5239 5240 5241 5242 5243 5244 5245 5246 5247  
 Upon the threshold. Mary saw the boy  
 戸口に 立つて マリアは少年を見た  
 Was not with Dora. She broke out in praise  
 Doraと一緒に 居ない マリアは讃言を述べた  
 To God, that help'd her in her widowhood.

▲ broke out in praise 戸口へ傍に物やを置たり突如として稱讃の言を發するを

5248 5249 5250 5251 5252 5253 5254 5255 5256 5257  
 And Dora said, 'My uncle took the boy;  
 マリアは云ふ 叔父は少年を取った  
 But, Mary, let me live and work with you:  
 マリアは云ふ マリアと共にならねえか  
 5258 5259 5260 5261 5262 5263 5264 5265 5266 5267



「彼は決して私を見ない」

He says that he will never see me more.

その時マリーの答へは「その言葉は〜」

Then answer'd Mary, 'This shall never be,

我が困難は御身が手に負へない」

That thou shouldst take my trouble on thyself:

今は〜我れ思ふに彼の人は我が見なば有つて

And, now I think, he shall not have the boy,

彼の人は我が子に無情を教へまた其の母をささるゝことあるべし

For he will teach him hardness, and to slight

我れをせむ

His mother; therefore thou and I will go,

我々は我が見を得て

And I will have my boy, and bring him home;

〜我れ彼の手に負はぬ

御身が取戻すべし

And I will beg of him to take thee back:

〜我れ若く彼の人は御身を取戻すべし

But if he will not take thee back again,

その時こそ御身我れと

〜家に帰すべし

Then thou and I will live within one house,

マリアムが兒の爲に働かなん

あの子が生ひた〜

And work for William's child, until he grows

わなみちを扶く〜

Of age to help us.

此の段はた殆ど解釋を要せざるべし。田舎乙女の口吻の、此れ彼れ共に質樸に寫されたり、そがなかにマリーは稍々世慣れて思慮もありげなるだけにアランを怨めしと思ふ心も、女心のまはり氣も、其のいひまはしにほの見えたり。かゝる無情き人に我が見を養はせなば、我が見も亦のづから情知らずとなりて、其の母をも忘るゝに至らん、母を母とも思はざるに至らんと、行末を思ひやりて、其の見を取戻さんといふあたり、ドラに對する義理のみにはあらで、母親かたぎの自然なるべし。▲「さることはゆめ〜あるべからず」は「ゆめ〜さることゝらしむべからず」



と云ふと同義。thisは次の行のthat以下の句の代詞と知るべし。

So the women kiss'd

Each other,

and set out, and reach'd the farm.

The door was off the latch:

they peep'd, and saw

That

The boy set up betwixt his grandsire's knees,

Who thrust him in the hollows of his arm,

And clapt him on the hands and on the cheeks,

Like one that loved him: and the lad stretch'd out

And babbl'd for the golden seal, that hung

From Allan's watch,

and spark'd by the fire.

From Allan's watch,

and spark'd by the fire.

▲「とみれば云々原詞にては抱きあげられたる童を見き」とあれど訓は態と語を前後して物をせり。▲「金印」とは懐中時計に添へて鎖もて吊し垂れたる黄金の印形也。▲かたいぢなる翁なれば如何にをさなごをむごくすらんかと心元ながりて往きて見れば思ひの外なる様なり。▲嬉しげなる見のふるまひ愛情深げなる翁のあしらしひふたりが貌見合はせて嬉し立もとほりしさま見るやうなり。

Then they came in: but when the boy beheld

His mother, he cried out to come to her:

And Allan set him down, and Mary said;

▲butと云ふ語かゝる處にては「流石に」の義となる。今までは祖父と共に機嫌よく遊びをりし見なれど今ふと母親の影を見つけて流石に得たはずや母のもとへ



行かんとて泣きさらだせるなり。△ to come は「往かんとて」と訓ずべし。英語にては come とするは往々我が「往く」「往かんとて」の義なり。I will come とするは「往かんとて」の義也。

「父を呼ぶ」 彼に告ぐる言は、父を呼ぶに非ざり

“O Father!—if you let me call you so—”

父を呼ぶに非ざり、父を呼ぶに非ざり、父を呼ぶに非ざり

I never came a begging for myself,

己は父を呼ぶに非ざり、己は父を呼ぶに非ざり

Or William, or this child; but now I come

己の父を呼ぶに非ざり、己の父を呼ぶに非ざり

For Dora: take her back; she loves you well.

父を呼ぶに非ざり、父を呼ぶに非ざり

O Sir; when William died, he died at peace

父を呼ぶに非ざり、父を呼ぶに非ざり

With all men: for I ask'd him, and he said,

父を呼ぶに非ざり、父を呼ぶに非ざり

He could not ever rue his marrying me—

父を呼ぶに非ざり、父を呼ぶに非ざり

I had been a patient wife: but, Sir, he said

父を呼ぶに非ざり、父を呼ぶに非ざり

That he was wrong to cross his father thus:

「父を呼ぶに非ざり、父を呼ぶに非ざり」 彼は父を呼ぶに非ざり

“God bless him!” he said, “and may he never know

父を呼ぶに非ざり、父を呼ぶに非ざり

The troubles I have gone thro'!” Then he turn'd

父を呼ぶに非ざり、父を呼ぶに非ざり

His face and pass'd—unhappy that I am!

父を呼ぶに非ざり、父を呼ぶに非ざり

But now, Sir, let me leave my boy, for you

父を呼ぶに非ざり、父を呼ぶに非ざり

Will make him hard, and he will learn to slight







如何に腸を断つ老父が悔恨の僅々數句のうちに見し盡くされたるかを見よ。  
▲「さはれ彼れをば愛せしぞや」の一句は老翁が肺肝底より沸きいてたるの語、さきに過酷と見られたりし處措は、其の實此の慈父が愛子に對する切愛の反動に外ならずなり。▲「嗚接吻せよ」云々、姪をも嫁をも今は我が實の子と頑固なる翁の我も折れ意地も推けたる、一しほに哀れなり。

この時ふたりの女中は驚がらなげに

Then they clung about

おちよこがし

おまたのら後むに接吻し

The old man's neck, and kiss'd him many times.

おちよこがし

And all the man was broken with remorse;

おちよこがし

And all his love came back a hundred-fold;

おちよこがし

And for three hours he sobb'd o'er William's child

オチヨコガシ

Thinking of William.

此の段とくくべし、教訓したれば原詞をよく讀みて會得すべし。

おちよこがしの思ひは幾世に

So those four abode

いち家のなかにおちよこがし

おちよこがしの思ひ

Within one house together; and as years

経たるおちよこがし

オチヨコガシの思ひは幾世に

Went forward, Mary took another mate;

オチヨコガシの思ひは幾世に

But Dora lived unmarried till her death.

末一句餘韻嬌々たり。



## 評釋の五

## アチソンの諷刺文

英國散文の名家として、今もなほ推重せられ、普く我が國の英語學生にも知らるゝは、エリザベス朝の著述家にては、上に評釋せしベーコン、所謂十八世紀の詞客にては、アチソン、デモンソン、スキャフトの三名家なるべし。就中アチソンは其の爲人も温厚にして、其の文はた雅馴、喩へば彼の徳川期に行はれし雅俗折衷の文章に似て平易通俗ながら、些も卑野に流れざる所、尤も愛すべし。更によろこぶべきは其の思想の穩健にして、偏僻の弊なきことなり。最も諷諧の文に長ぜり、面白くをかしく世を諷して、悠々迫らざるうちに、おのづから誨味啓蒙の力あるはアチソンが特徴なり。

アチソンは一千六百七十二年に生まれ、同七百十九年に逝り、今よりは殆ど三百年ばかり前の人なり。幼きころはチャーターハウスといふ學舎にて修學せしが、後にオックスフォード大學に入りて業を卒へ、さて後幾ばくもなく、時の國

王の爲に頌徳の詩を作りて献りし功にて、一年三百ポンドの年俸を給はり、剩へ歐洲大陸漫遊の費をも賜與せられき。アチソンが閑雅なる天性と優美なる文才とは、當時歐洲第一の文華の國たりし佛蘭西、伊太利を歴遊せしが爲に、いよく圓美の致を極めき。彼れは恭謙寡黙、何事につけても他と争ふことを好まざりし人なり。政治上の意見は自由改進の主義なりしが、反對の黨人をも口ぎたなく攻撃せしことは絶えてなきゆゑ、如何なる黨派にも惡まれずして、改進黨大敗の秋にも衆議院の議員に再選せられ、該黨全盛のころとなりては、累進して國務總官の高官までも經登りき。こはもとより節を二三にせしが爲にあらず、其の自然の愛敬と温雅なる天性との然らしめし所なりき。

アチソンは博學多才なりしと同時に、廣く人情世態に通じ、俗に謂ふ通人の高雅なるものに似たり。我が化政度の作者中に似たるを求むれば、人柄もどことなく柳亭種彦の面影ありて、文もまた時としては幾分か似たる所あり、但し種彦の文章は概して遊戯三昧の趣あれども、アチソンの本願は俗を誨へ、諷を啓くにありて、その諷刺の鹽梅は故成島柳北が「朝野」の雜錄に似て、更にはるかに巧妙なるものなり。



其の著述は種々あれども、尤も世にもてはやさるゝは「スペクテーター」の「観察者」といふ定期刊行物なり。こは彼れが其の友スチールと共に發行せし鈴木田時代の「讀賣新聞」に幾らか似たる刊行物にて、英國の社會的新聞の開祖とも稱すべきものなり。毎朝の發兌にて、六百三十五號まで續きたり。専ら誠世風俗の文章を掲録せるものにて、主筆の本意は英國の領外に非徳と蒙昧とを驅逐せん爲に外ならざりしなり。該誌に載せたるアチソンが文章は種々雑多にて、堂々たる長論文もあれば、おかしき滑稽の諷刺文もあり、考證に類する文章もあれば、端物小説に似たる物語もあり、輕妙なる寓意譚もあれば、洒々落落たる論文もあり。假に種々の人物をつくりて眞に實在せる人の如くに狀寫し殆ど寫實小説を讀むが如く思はしむる文もあれば、嚴肅なる倫理を談じてそらに讀者をして襟を正さしむる文もあり。まことに千變萬化の筆、前後に其の比類稀なりとす。而も要するに其の旨は皆修身齊家の訓、陋野を懲治し、高雅を扶掖し、肉慾をいやし、道義を獎勵するの意にてさるはなし。まかれどもアチソンの意見は皆て實際と離るゝことなし、すなはち世間的道義論にして、哲學としては高遠ならざること勿論なり。されば其

の宗教思想の如きも、今日の目をもて見れば、毎に幾分の俗臭を帶べり。彼れは屢々未來を脱くも、決して現世間の禍福を忘れず、否むしろ未來世の幸福を餌として現世間の善行を釣りいださんと力むるものゝ如し。彼れはいへらく、現世にての人々の務は知るにあらで、行ふにありと、其の實踐躬行を旨とせる、儒學と一なり。論者動もすれば之れを失としてアチソンが想の高からざるを譏れども、通俗雜誌の記者としては、蓋し止むを得ざる所なりしならん。

アチソンは其の存生中には詩人として名高く、劇の作家としても知られたりしが、今日の標準より見れば、此等の作には殆ど稱すべきほどのものなし。所詮彼れは散文の名家にして眞の詩人にはあらず。吾々のアチソンに於て最も服する所は、其の觀察の精細なること、其の頓智滑稽の上品にして自在なること、其の思想の穩當公平なること、其の措辭の巧妙なることのみ、而して其の觀察は彼のベリコンの如く抽象的にもあらず、はた其の文章もベリコンの如く高雅に失することなく、平易通俗にして靈妙なる所、實にアチソンが文章の特質にして、また十八世紀文學の特質也。



アチソンが「スペクテーター」に掲げたる論文、諷刺文、比喩談、戯文等は、とり／＼にかしからぬはなきが中にも、とりわけて其の頃の浮靡遊惰なる風俗の見えてをかしきは、つぎに譯する二篇なるべし。其の一は「伊達男が頭腦の解剖」と題し、其の二は「男たらし(娼婦)が心臓の解剖」と題せり、共に遊惰淫逸なる當時の社會を諷刺せるものなれど、筆つきの高雅にして婉曲なるは、此の作者の特得にて、他人の企て及ばざる所なり。但しアチソンの滑稽は我が一九三馬などのとはいたく趣を異にして、専ら含蓄を以て勝るものなれば、深く咀嚼せざれば旨味をさとりがたし。文體は頗る平淡なる雅俗折衷文にして、語法文格なども正しきものなり、勿論下の譯はそのかたかけをも現するに足らずと知るべし。

伊達男の頭腦の解剖

Dissection of a Beau's Head.

「伊達男とは伊達を專とする男の謂にて、俗に謂ふキドリヤなり、艶治郎なり、京傳の

洒落本などに見ゆる遊治郎に似たるものなれど、彼れは中流町家のキドリヤこれ  
は紳士社會の艶治郎なり。我が國の例もていはゞ緋繪緋の襦袢など着るやから  
なり。近ごろ所謂ハイカラの昔ぶりなり。

I was yesterday engaged in an assembly of virtuosos, where one of them produced many  
curious observations which he had lately made in the anatomy of a human body. Another  
of the company communicated to us several wonderful discoveries, which he had also made  
on the same subject, by the help of very fine glasses. This gave birth to a great variety of  
uncommon remarks, and furnished discourse for the remaining part of the day.

右の一節をほゞ語を逐うて譯すれば、左の如し

ものれ昨日、好事家連の一會キョウゴに参したりき、その折列席者の一人が、近ごろ解剖  
せし人體のことに關して、おまたの奇しき觀察を語りいでしに、他のひとり  
もまた同じことがらにつきて、いみじき顯微鏡の助けにても、せりし種々の  
不思議なる發見を報じたりしかば、やがて種々の珍らしき批評を生みて、其の  
日の殘暑の話柄となりにき。



まぢめだちて言ひいてたる口吻ながら老練なる落語家の序説を聴くがごとし。はじめより笑謔するは所謂前座の駄洒落なり、マチンの滑稽は真面目の裏のをかしみにてをも言はぬ妙味なり。原文を細嚼して、如何に言々の温厚篤實なる紳士の微笑しつゝ低語する面影を映出せるかを見よ。

The different opinions which were started on this occasion presented to my imagination so many new ideas, that by mixing with those which were already there, they employed my fancy all the last night, and composed a very wild, extravagant dream.

その折提出せられしいろ／＼の説は、予が想像にあまたの新しき想念を浮べしめたり、かくてその新しき想念は兼ねて胸にありし他の想念と打混じて、昨夜はよもすがら予が空想を使役し、いと／＼荒唐なる夢を醸さしめき。

▲想像にあまたの新しき想念云々は、詳しくは予が想像力を刺戟して、許多の新しき空想を醸し、いだしめきといはんほどの義なり。この「想像」といふ語も、末段の「空想」といふ語も、國文にてはあしなべて「こゝろ」と譯して可なるべし、共に心の作用をいふなり、詳しくは「想像を司る心のはたらき」、「空想を司る心のはたらき」と

いふことにて二者同義也。

和漢の寓意談にもかなたのにもまつはじめは現の事らくし物して、最後に愕然と驚き覺むれば、南柯の一夢なりきとやうに巧を弄せる例さにはわれど、そはなかなかのことなりてをかしからず、初めよりむきだしに夢と断れる筆つきりとまとなびたり。

I was invited, methought, to the dissection of a bean's head and of a coquette's heart, which were both of them laid on a table before us. An imaginary operator opened the first with a great deal of nicely, which, upon a cursory and superficial view, appeared like the head of another man; but upon applying our glasses to it, we made a very odd discovery, namely, that what we looked upon as brains, were not such in reality, but an heap of strange materials wound up in that shape and texture, and packed together with wonderful art in the several cavities of the skull. For, as Homer tells us, that the blood of the gods is not real blood, but only something like it; so we found that the brain of a bean is not a real brain, but only something like it.



予は思ひけらく、予は艶治郎の頭脳と娼婦の心臓との解剖の席に招かれたりしに、件の品はふたつとも前なる卓上に置かれたりきと。さて予が空想の生みいだせる手術家(外科醫)は許多の精練なる技術もてまづ前者(艶治郎)の頭を截開せり、そはふと打見たる所にては、餘の人の頭脳とおなじげに見えたりしが、顕微鏡を適用するに及びて、いと奇妙なる發見をなしぬ。即ち腦髓と見たりしは、實はさるものにはあらで、奇なる一つがねの品を彼の物の形に編みあはせ捲きつけて、顛骨の種々の凹處に驚くべく巧みに詰めこめるなりけり。蓋し希の詩人ホーマアが神祇の血汐はまことの血にはあらず、幾分かそれに似たる物なりといへる如く、艶治郎の頭脳も、まことの頭脳にはあらで、只幾分かそれに似たる物たるを知りぬ。

生理上の試験法たる解剖を心性の上に借り來たれる着想、其個人意の表にいてなり。尤も妙なるは、あくまでも謹厚げなる作家の筆つきなり、事柄いよ／＼をかしくして、語る人はいよ／＼まぢめなり。

希の詩人ホーマアは、古今屈指の大詩人『イリヤム物語』といへるを著して、其のうちに神祇相闘ふことを記せり。希臘の古神祇は、尋常の人となじく、傷して血汐を流すことあり、されど其の血は「アイユル」といふものにて人間の血とは別なりといふこと、彼の物語のうちに見えたり。かゝる滑稽の諷刺文の中にいかめしう古典を引用し、尤もらしう粧へる作者のつらつきをかしからずや。

The pineal gland, which many of our modern philosophers suppose to be the seat of the soul, smelt very strong of essence and orange-flower water, and was encompassed with a kind of horny substance, cut into a thousand little faces or mirrors, which were imperceptible to the naked eye; inasmuch, that the soul, if there had been any here, must have been always taken up in contemplating her own beauties.

我が近世の理學者等の多數が魂の在所と假定せる松子腺は、香水と橙花水との爲にいと鋭くにほひ、且つ肉眼には見えざりし無数のさ／＼やかなる面(即ち鏡面)だつものに刻まれたる角やうの物質もて圍まれたり、されば魂にして此にありしならんには、必や常にそのがつらつきの美しさを打録むるとにのみ耽りたりしならん。



▲「理學者の原語 philosophers 今は哲學者」と訓ずるが常なれど、昔は醫學者、天文學者などやうの窮理學者をもフィロソフスといへりき、本文の場合の如き是れなり。▲「松子腺」とは、脊椎動物の頭腦中にある腺形の物なり、松子に似たるゆゑ、かくは譯せり、人間の靈魂は此の物の裡に住せりといふ説、十八世紀のところ行はれたり。▲「橙花水」も香水の一種。▲ *insomniah* は次の *that* といふ字と合譯して「されば又は「さるからに」と訓ずべし、場合によりては「云々なる程に」「云々と思はるゝばかりに」など次の句より訓み戻りてもよし。▲ *any* の次に *soul* といふ字はぶかれたりと思ふべし。▲ *take up* は「心を奪はる」又は「耽る」の意。▲ *beauties* と複數に物せるは、美しき目、美しき鼻、口元など種々に見らるゝゆゑ也。▲ *contemplating* は「冥想」なども譯す、つくゝと打詠むる意なり。

此の一段落の可笑味は結句にあり、我れぼめの男女を嘲りて、山鳥のゑろの鏡を引き事にするはめづらしからねど、眞面目なる學説を小楯に取りて、自惚子の臍をまぐりたるは面白し。魂の在所といへる松子腺が鏡だつものもて圍まれたりとは、自惚子の平生を諷刺し得て痛切なり。總じてフチソンの滑稽は、俗に謂ふ「落

なり、讀者須からく熟考して、其の諷刺の妙を覺るべし。

We observed a large *antrum* or cavity in the *sinciput*, that was filled with ribbons, lace, and embroidery, wrought together in a most curious piece of network, the parts of which were likewise imperceptible to the naked eye.

(さて)前頭部なる一大腔、即ち凹める處を觀察せしに、そはいと珍奇なる一種の網細工風に編みあはせたる飾紐、笹縁、刺繡などをもて充たされたり、是れはたその細き部分は肉眼には見えがたかりき。

▲あくまでも眞面目なる解剖學者の口吻をまねびて、シンシプツト(前頭部)アントラム(腔)など仔細らしく言ひ做したるところをかしみ也。▲「飾紐」「笹縁」のたぐひは虚飾品也、我が國の例もていはば、羽織の裏地に數寄を盡くし、帯又は羽織の紐などに伊達を街ひ、華奢風流に浮身をやつすたぐひ也。「ニヤケ男の頭腦中には必定かゝる品のみ充滿せらるゝならん、彼れが一念は晝夜かゝる虚飾にのみ傾ければなり」といふ意を、尤も婉曲にいひあらはせるなり。其の細き部分は肉眼には見えがたかりき」とわざと餘韻を残して逃げたる書きぶり、いと巧み也。



Another of these antrums or cavities was stuffed with invisible billet-doux, love-letters, pricked dances, and other trumpery of the same nature.

他の一腔即ち凹みも(同じく)肉眼には見分けがたき艶書玉章、舞蹈會の紙牌としては同じたぐひの淫きたる品々(trumpery)もて塞がりたり。

▲billet-douxは佛蘭西語、次の「玉章」と同様に専ら戀の書簡を指す、常は二者同義也。こゝにてはやゝ簡短なる端書やうの艶書を billet-doux と名けたるにや。▲舞蹈會の紙牌とは舞蹈會の番組をまるせる紙牌なり、總べて彼なたの舞蹈は男女ふたりづゝ打連れて踊るなれば、開會に先だちてあらかじめ組合を定むる也。▲prickedとは我れと組合ふべき女の定まりし時に、其の紙牌の番組に針もて印を附くるをいふ。畢竟踊は人前をつくらふ道具にて、まことは此れを傳手に、みだりがはしき縁邊を求むるなり。▲マヂソンの意は、如何にニヤケ男の腦中のきたなくあさましく、色情又は浮氣又は虚飾などいふ念の外に無一物なるを示すにあり。

In another we found a kind of powder, which set the whole company a sneezing, and by the scent discovered itself to be right Spanish.

(又)他の凹みには散藥やうのものありて、一同を嚏せさせき、そは其の基にて、醇西班牙と知られたりき。

此の段尤も妙なり、一同がまぼえずたゞろぞて嚏せる面持、見るやうなり。▲醇西班牙とは、其のころの洒落者、半可通などの賞翫せし煙草の一種にて、嗅煙草と稱するもの也。西班牙産を本場物と稱して珍重せり、鼻先にあてゝ嗅ぐまでの贅澤品にて、香のいと高きものとぞ。醇とは、まがひにあらざとの意。ニヤケ男などは兎もすればかゝる品を懐中して、芬々たる異臭を放ち、傍人の迷惑を思はぬもの也。

The several other cells were stored with commodities of the same kind, of which it would be tedious to give the reader an exact inventory.

他の種々の凹處にも、同じ様の品あまたありしが、その精細なる目錄をば、讀者に擧示せんは、管々しかるべし。

There was a large cavity on each side of the head which I must not omit.

頭の左右に、大なる一凹處ありき、こは(必ず)説を洩らすべからざるなり。

That on the right side was filled with fictions, fatteries, and falsehoods, vows, promises,

マヂソンの頭蓋文



and proleptations; that on the left with oaths and imprecations.

右の方なるは、虚構、追従、詐偽、誓言、約束、分疏などをもち、又左なるは、起請と呪咀とをもち、充たされたりき。

遊治郎の脳中には、卑劣なる情慾の外は、宿れるものなし、常に婦女をあざむきて我がものとし、ほしむに弄ばんと思ふ心のみが盛なる故に、上に擧げたるやうの物のみ頭腦の凹處に充滿せりとなり。▲虚構以下の文、平々淡々として簡潔なりと雖も、苟も人情に通じたらん讀者は、此の簡短なる乾文字の中に、痴男痴女が相戯るゝさま、相罵るゝさま、相狎るゝさま、相あざむくさまなど、總じては浮靡狎褻なる當時の社會の姿態として浮動せるを見るべし。

There issued out a duct from each of these cells, which ran into the root of the tongue, where both joined together, and passed forward in one common duct to the tip of it.

(さて)件の穴の雙方より、一筋の管をさし、舌の根がたに達き、そこにて相合して同一道の管となり、さて舌の尖に達したり。

解剖の順序のいとく精細なるを見るべし。三馬等の諷刺は鳥羽繪の如く、アチ

ソンの諷刺は油繪の如し。此の段は腦裡の「虚構」追従等が、單に腦裡に存せしのみであらば、常に口に傳はりし由を顯示せるなり。

We discovered several little roads or canals running from the ear into the brain, and took particular care to trace them out through their several passages.

(又耳よりして腦髓に流れ入れる種々の小き路、即ち溝(の如きもの)を發見せしかば、其のさまざまの通路を尾ひて、その行くを探らんと欲し、特別に意を注ぎしに、

One of them extended itself to a bundle of sonnets and little musical instrument.

其の一は一束の小歌集と、さゝやかなる樂器とに達し、

遊治郎の耳に聞き腦にといめたる事は、如何なる事どもならんと、一きは留意して解剖すれば、耳より腦に入れる溝の奥に、一束の小歌集、浪花ぶしど、一はうた、とちり、とんと、さゝやかなる樂器(三味線、尺八、又は月琴)などを發見せりとなり。尤も、聞くばかりにはあらず、小歌を作り、樂器を弄しなどして、徒らに遊び暮せるをも諷したり。



Others ended in several bladders, which were filled with wind or froth.

他の諸溝は風と泡とをもて充ちたる種々の膀胱に至りてとゞまりぬ。他の諸溝の奥には風の如き何の益もなき談話(泡)の如き何の意味もなき謬語(あり)のみ。

But the large canal entered into a great cavity of the skull, from whence there went another canal into the tongue.

さもあれ其の中の大なる溝は頭顱骨の一大凹處中に流れ入り(さて)そこよりまた一溝發して舌の中に流れ入れり。

This great cavity was filled with a kind of spongy substance, which the French anatomists call *gaimatius*; and the English, nonsense.

此の大なる凹處は海綿やうの物質もて充たされたりこれを佛蘭西の解剖學者等は「ガリメーシヤ」と名け英國の學者等は「謬語」といふなり。

遊治郎が腦より發して其の舌に出づるものは一つとして取るに足る價值なし其の首ふこと彌と多くして其の價值彌と少なしすなはち悉く謬語のみムメートの

みといふ意。

むねくしく佛蘭西語を取りいだし來て、さも科語らしく見せかけたる尤もをかし。「ガリメーシヤ」とは英語 nonsense と同義、ムチャムチャ「メチャメチャ」無意義又は「たはごと」の義也。▲海綿やうの物質「ムム」とは海綿は能く水を吸ひこむ物ゆゑ、遊治郎の頭腦のシダラムートを際限もなく肥臆するに長ぜるを海綿の水を含蓄せむに喩へたる也。

The skins of the forehead were extremely tough and thick, and what very much surprised us, had not in them any single blood-vessel that we were able to discover either with or without our glasses;

前額の皮は甚しく剛うして厚かりき、さていたく驚かれしは、件の皮膚のうち「唯一」の血管をだに發見する能はざりしことなり、顯微鏡を用ふるも、將用ひゆるぬ。

from whence we concluded, that the party, when alive, must have been entirely deprived of the faculty of blushing.



さるによりて一同断じけらく、必定此の者は其の世に在りし間、全く顔を報うする作用を缺きたりしならんと。

半可通が鐵面皮を罵り得て餘蘊なしといふべし。▲partyと云ふ語かゝる場合には、此の輩など譯しても可也、但し必しも、複數の義に解するの要なし、彼の法廷語にて被告原告を party と稱すると同用法なればなり。

The os cribriforme was exceedingly stuffed, and in some places damaged with snuff.

篩狀骨は甚しく填塞せられ、且つ處々嗅煙艸の爲にてそこなはれたり。

▲篩狀骨とは嗅神經の纖維が通過せる骨なり。▲この一句は、半可通が伊達の爲に嗅煙艸を用ふるの甚しきを嘲り、彼れの如く、断えず用ひなば、竟には嗅神經に損害を及ぼさるを得ざるべしと笑ひたるなり。其の他香水又は薰物を用ふることの甚しきをも諷せり。

We could not but take notice in particular of that small muscle, which is not often discovered in dissections, and draws the nose upwards, when it expresses the contempt which the owner of it has upon seeing anything he does not like, or hearing anything he does not

understand.

さて彼の稀にのみ剖拆中に發見せらるゝ鼻を引き揚ぐる小筋肉につきては、特に意を留めて検査ざるを得ざりき、件の筋肉は其の主(鼻の持主)がその好まざる物を見、若しくは會得せざることを聽きて蔑如の意を表する時、鼻をうごめかすに用ふる者なり。

此の段、嚴密に語を逐うて訓ずれば、解しにくくなる恐れあれば、わざと末句だけは義訓せり。▲凡そ半可通の氣障なる心術は、兎角に鼻の先にぶらつくものなり。我が國の俗言に「鼻であしらふ」又は「鼻をうごめかす」高慢が鼻にぶらつくなどの語あり、思ひあはせて此の段の隱微を味ふべし。▲could not but は「つゝ」「何々せざるを得ざりき」と訓ずべし。

I need not tell my learned reader, that this is that muscle which performs the motion so often mentioned by the Latin poets, when they talk of a man's cooking his nose, or playing rhinoceros.

我が博覽の讀者に予は敢て告ぐるを要せず、此の筋肉は彼の羅旬詩人等が人



の鼻を物起らすこと、即ち、*犀をまねぶ*ことを言ふ折に、いと麗く筆にせる(鼻の)運動を成さしむる筋肉なり。

此の句の可笑味は今日の讀者には傳へがたし、按ふに、物昧らしく羅句詩人が句中の語を引き來たれる所にあるべし。當時は何事もいにしへを尊崇せし時代として取りわけ、詩文などを論評するには、必ず羅句の作を例證とせしこと猶こなたにて唐宋の作例又は「古今『萬葉』」などの例を引合に出だすが如し。▲*犀をまねぶ*とは、蔑如嘲侮の意をあらはす爲に鼻をいからしむることを、*犀といふ獸が鼻頭をそりかへらするに喩へたるなり*。總べて詩人は、*失火といふべきをも「祝融怒る」といひ、「風といふべきをも「風伯」といひ、「兎角に物に比していふがならひなり、「犀をまねぶ」とは「ぞうごめかす」といふこと*に對する慣用譬喩と知るべし。

We did not find anything very remarkable in the eye, saying only that the *musculus amatorii*, or, as we may translate it into English, the ogling muscles, were very much worn and decayed with use;

眼には何等の深く注意すべきものをも見いださざりしが、只秋波筋、即ち英語

に譯して斜視筋肉ともいふべきものは、たび／＼用ひたりと見えて、痛く磨りへらされ、破れ損じたり。

whereas, on the contrary, the elevator, or the muscle which turns the eye towards heaven, did not appear to have been used at all.

然るに之れに反して、昂起筋、即ち眼を天邊に向かはしむる筋肉は、絶えて用ひられたりとも見えざりき。

平可通が眼は常に美女を斜視するの用にのみ供せられ、曾て敬神崇天の爲に用ひられたることなし。天を仰ぐは敬虔の念深き者に限る、遊治郎等の曾てせむることなり。

We were informed, that the person to whom this head belonged, had passed for a man above five-and-thirty years; during which time he eat and drank like other people, dressed well, talked loud, laughed frequently, and on particular occasions had acquainted himself tolerably at a ball or an assembly;

聞く所によれば、此の頭腦の主は、三十五年間以上、一個の男と見做されたりき



とか、その間餘の人々にひとしく、飲食し、善装し、高聲に談話し、まば／＼笑ひ、又格別の折々には、舞踏會もしくは集會などにて、頗る見にくからず振舞ひにきとか。

▲「一個の男云々」嘲り得て痛快也。▲「飲食し、善装し」以下、よく半可通の平生を簡叙し盡くせり。▲*eat*といふ語今は現在動詞としてのみ用ふれど、マチソンの頃には今の *ate* にひとしく、過去動詞にも用ひたり。

*to which one of the company added, that a certain knot of ladies took him for a wit.*

一座中のなにかし、此の話につきて、さる一團の婦人等が、彼れをば才子視してありし由を語れり。

かゝる卑しむべき遊治郎も、或種類の婦人等には、才子とも通客とも思ひなされ、存外に悦ばるゝなり。▲*certain* といふ語は「或」といはんよりは一段確實なる意味を含めり、*some* も「ある」も國語にては同じなれど、今好譯語を得ざれば假に「ある」といふ言葉を「ある」といはんよりは、やゝ重き意と見做して用ひつ。▲*took* は「信ず」「思ふ」「考ふ」などの義に解すべし。

*He was cut off in the flower of his age by the blow of a paring-shovel, having been surprised by an eminent citizen as he was tendering some civilities to his wife.*

彼れはその男盛りのころに、糊もて毆打せられてみまかりなき、名ある一市人が妻に或慫慂を施しつゝありし折、突然其の夫なる人に襲はれしに困るとなり。

▲*surprise* は「突然襲ひ驚かす」の義。▲「或慫慂、毆打せしめて妙なり。」▲*flower* は「真盛り」とはん程の義。▲*eminent* 「卓越」の義、こゝは「名ある」と訓じて可なり。

*He applied himself in the next place to the coquette's heart, which he likewise laid open with great dexterity.*

手術家は、次に媚婦の心臓に着手し、これをもいと巧みに截開せり。

*There occurred to us many particularities in this dissection;*

此の剖拆中にも、許多の殊やうなる事起こりたりしが、

▲「殊やうなる事」とは、はゞ「珍らしき事」といはんが如し、格段なる事の義也。

*but being unwilling to burden my reader's memory too much, I shall reserve this subject*



for the speculation of another day.

あまり多く讀者の記憶力を困しめんも好ましからねば、こは他日の考案の料に保存し置くべし。

『スベクターニア』に掲げたる原文は、上に訓釋せるよりも、尙二三節がた長きものなれど、管々しく興味無きを、其のまゝ譯し、いださんも要なからんとて省きつ、原文と併せ看ん人怪しみたまふ勿れ。尤も近年出版に成りし教科書類に見えたる此の寫しは、此に譯出せるよりも尙一層省かれたり。

男たらしの心臓の解剖

Dissection of a Coquette's Heart.

「媚婦が心臓の解剖」と題したる諷刺文は、上の戯文の掲げられて後一週日を経て、『スベクターニア』の紙上に出たり。旨意は前のにひとしく、當時の輕薄なる風俗を

諷するにあり。「媚婦」とは我が國の娼婦若しくは白拍子の如く男の心をとらかし、露ほども臆なうして情深げにもてなすものをいふ、但し娼婦にはあらず。十八世紀のころは更なり、現今の社會にも歐米には「媚婦」といふもの中流上流に夥多あり。蓋し男女混合の交際盛に行はるゝ社會にては、肉をこころ賣らざれ、自家の才藝、容色に誇りて、年若き紳士等を掌上に弄び、媚を呈し、情ありげにもてなし、いざといふ場合となりて、俄に之れを打すて、願ざる浮薄なる女性尠からず。彼等の心術は我が國の藝娼妓などに異なることなし。而して十八世紀の社會は其の最も甚しかりし時にて、當時の交際社會は、一種の高雅なる娼樓ともいふべく、所謂上流中流の貴婦人は、眸のよき白拍子にもたぐへつべし。只其の白拍子と異なる所は、女尊男卑の國柄とて、みづから高く標置し、常に威嚴を保ち、男に媚ぶるにも秋波を第一の武器とし、嬌態を第二の方便とし、自家の品位を下さずして、男性の心を籠絡せしに在り。白拍子の場合にては、男は顧客なるが故に主位を占む、彼れに在りては、所謂媚婦は皆貴婦人なるが故に、男子却りて賓位に立てり、此の區別をわきまへて下の文を味はば、アチソンが諷刺の隱微掌故を數ふるが如くなるべし。



Having already given an account of the dissection of a bear's head, with the several discoveries made on that occasion, I shall here, according to my promise, enter upon the dissection of a coquette's heart, and communicate to the public such particularities as we observed in that curious piece of anatomy.

伊達男が頭腦解剖の件は既に其の折發見せし種々の事柄と共に語りつれば、こゝには約に従うて、娼婦が心臓の解剖に及び、此の珍らしき一種の解剖術に於て予等が觀得たりし殊なる事どもを報せん。

▲ to the public とは「世間」の義、則ち「世人に報せん」の意也。

Our operator, before he engaged in this visionary dissection, told us, that there was nothing in his art more difficult, than to lay open the heart of a coquette, by reason of the many labyrinths and recesses which are to be found in it, and which do not appear in the heart of any other animal.

手術家は此の架空の剖拆に着手せし前に予等に語りけらく、凡そ解剖術のうちにて娼婦が心臓を截開するばかりむづかしきことはなし、その故は曾て他

の動物の心臓中には見えざる、許多の迷路やうのもの、隠處めくもの、其の裡に見いださるればなりと。

娼婦が心に定操なく、表裏常なく、殆ど端倪すべからざるを諷せんとして、かつ其の心臓の組織を略説して、彼等が行ふ所の變幻極無きは、其の心臓の組織の香の圖の如く、八重櫛の如く、摸索しがたきに基くと做す妙想とせん。

▲ visionary 夢裡の解剖なるが故に、*pericardium*, or outward case of the heart, which

we did very attentively;

彼れは、まづ第一に、心胞すなはち心臓の外被を觀察せよと要めしかば、すなはち細心して之れをなし。

and, by the help of our glasses, discerned in it millions of little scars, which seemed to have been occasioned by the points of innumerable darts and arrows, that from time to time had glanced upon the outward coat;

さて顕微鏡の助けによりて、それが表面に數百萬のさしこめやかなる傷痕ある



を認めき、この傷は間なく其の外皮上に閃きし無数の箭、投矢などの尖に基けるものなるべきか。

though we could not discover the smallest orifice, by which any of them had entered and pierced the inward substance.

そがかりそめにも内質に透入せし時の孔と見ゆるは、いとく小かなるをだにえみちりき。

好色の男子等が、女のく媚婦に心を奪はれ、我れはくとの惚れて暮ひ寄れど、只ひとりだに媚婦がまことの情にあつかりし者は無し。▲「箭、投矢」とは暗に好者が秋波に喩へたるなり。▲俗説に謂ふ小野小町が話などは、上流社會の媚婦の一例なり、九十九夜まで、淫草の少將を翻弄せし手ぎは、彼なたの媚婦に於て常に見る所なり。

Every snatterer in anatomy knows, that this pericardium, or case of the heart, contains in it a thin reddish liquor, supposed to be bred from the vapours which exhale out of the heart, and being stopped here, are condensed into this watery substance.

少しく解剖學を心得たる者は皆知る如く、此の心胞、即ち心臟の外被の中には、赤味を帯びたる薄き液状あり、そは心臟より發生する蒸氣が、此の外被内に停められて、やがて凝り做して、水質となれるなりと假定せらる。

Upon examining this liquor, we found that it had in it all the qualities of that spirit which is made use of in the thermometer, to show the change of weather.

此の液状を試験するに及びて、予等はととりぬ、こは彼の寒暖計といふものを用ひられて、天氣の變動を表示する、酒精の諸性能をば具備したりと。

此の意表に出でたる落想のをかしみは、説明を加へずとも、下文を読みゆくうちに、そのつから明瞭となるべし。

Nor must I here omit an experiment one of the company assures us he himself had made with this liquor, which he found in great quantity about the heart of a coquette whom he had formerly dissected.

こゝに語り洩らすまじきは、列席者の一人が、嘗てみづから此の液もて物したりと斷言せる一條の實驗なり、彼れは其が嘗て剖拆せし媚婦が心臟の周邊に



まびたゞしく此の液を發見せりとなり。

He affirmed to us, that he had actually enclosed it in a small tube made after the manner of a weather-glass; but that, instead of acquainting him with the variations of the atmosphere, it showed him the qualities of those persons who entered the room where it stood.

彼は斷證すらく、彼れは現に、そをば風雨錶にならひて作れる一小管のうちに入れたりしが、(案外にも)そは尋常の風雨錶とはちがひ(太氣の變動を知らしむること)をばせて、そを置く室に入來る諸人の資質のみを示したりきと。

He affirmed also, that it rose at the approach of a plume of feathers, an embroidered coat, or a pair of fringed gloves; and that it fell as soon as an ill-shaped periwig, a clumsy pair of shoes, or an unfashionable coat came into his house:

又斷證すらく、そは羽根飾刺繡せる外衣、又は縁飾ある手袋の近寄ればすなはち丹り醜き假髮、ぶざまなる靴、又は不風流なる外衣の其の家に入り來るや、隨て降りきと。

may, he proceeded so far as to assure us, that, upon his laughing aloud when he stood by it,

the liquor mounted very sensibly, and immediately sunk again upon his looking serious.

加之、彼れは更に進みて、彼れそが傍に立ちて聲高に笑ふときは、此の液いぢじらく上昇し、なて眞面目なる面地すれば、やがて忽然と降下せりとまで確言するに至りき。

In short, he told us, that he knew very well by this invention whenever he had a man of sense or a coxcomb in his room.

要するに、彼れは語りけらく、彼れは此の新發明によりて室内なる人々の賢と愚とを毎に詳かに知ることを得たりと。

媚婦のよろこぶ所は華奢と浮靡となり、されば媚婦によろこばるゝは遊冶の徒にあらざれば、輕薄の徒なり。其の友を見れば、以て其の人の人柄を知るに足るべし。遊冶、嫵媚の徒は、只管無意義笑諠を喜ぶものなり、されば談ずること眞面目となれば、緊縮し、辟易す、マチソンが婉曲の筆は、彼の輩が弱處を痛刺して、精妙なり。

Having cleared away the pericardium, or the case and liquor above mentioned, we came to the heart itself.



かくて心胞即ち外被<sup>よみ</sup>并ひに上にいへる液体を取り除きて後子等はいよ／＼  
心臓の解剖に着手せり。

▲かくる場合の *itself* は「心臓の本體」といふほどの義なればこゝには「いよ／＼」といふ言を用ひて其の意をあらはせたり。 *itself* を「其の物」と訓ずるは近ごろのな  
らはしなれどいかにや。

*The outward surface of it was extremely slippery, and the micro, or point, so very cold  
withal, that upon endeavouring to take hold of it, it glided through the fingers like a  
smooth piece of ice.*

(まかるに)その外面<sup>おもて</sup>ことの外<sup>ほか</sup>平滑<sup>なめらか</sup>にて細尖<sup>さいせん</sup>即ちトガリたるところいと冷<sup>ひや</sup>なり  
しかば、そを把らへんと力むる程に、さながら滑かなる氷片のやうに、つと指の  
間をすべりぬけき。

娼婦が心の浮薄冷淡なるを諷刺せるなり。 ▲細尖<sup>さいせん</sup>とは解剖學上の語、心臓の頂點  
の尖りたるあたりを指す。

*The fibres were turned and twisted in a more intricate and perplexed manner than they are*

*usually found in other hearts; inasmuch, that the whole heart was wound up together like a  
Gordian knot, and must have had very irregular and unequal motions, whilst it was employed  
in its vital function.*

(ち)織維は他の心臓中に通例發見せらるゝよりも、更に幾層か紛糾錯雜して  
纏綿したれば、心臓全體はさながら一箇のゴルチオス<sup>ゴルチオス</sup>纒<sup>り</sup>のやうに捲き束ねら  
れたり。さればそが活作用に用ひられたりし折には、一定不規律且つ不平等  
なる運動をなせりしならん。

此の段はた娼婦の無節操なるを説く、其の定見なうして多情なる性は其の心臓の  
組織に見えたりとなり。「浮草やきのふは東<sup>あづま</sup>けふは西<sup>よし</sup>なる浮氣心のすこしも定ま  
らぬからは、心の臓の組織もこゝに物したる如く、複雑至極の物なるべしとなり。

▲「ゴルチオス纒」とは希臘の古事也昔フリマヤといふ國の王にゴルチオスといふ  
君あり、天神チユースといふに、車一輛を獻じ、その柱の傍に其の車を繋ぐとて木皮も  
て長き紐を作り、さて輓<sup>くま</sup>に結びたるが、其の纒<sup>り</sup>堅うして解くべからざりき、さるほど  
にチユース神の託宣ありけり、曰はく此の纒を解きほぐし得ん者は全亞細亞に君た



るべしと。後年歴山大王の此の地に來たるや、かゝる額るときほぐしがたき理あらんやとて、まばらくは手もて試みけるが、やがて佩劍を抜きて只一聲に結び目を切断し、我れこそはユルチオス額を解きたれ、やがて全亞細亞に君たらんといひけり。此の古事によりすべて紛糾錯雜せる額のことを、ユルチオス額といふ間と盤根錯節若しくは亂麻などいふ意味にも用ふ。

*One thing we thought very observable, namely, that upon examining all the vessels which came into it, or issued out of it, we could not discover any communication that it had with the tongue.*

一事の甚だ注意すべく思はれたるが、ありき、他なし、こゝに通へる、又はこゝより出でたる一切の管どもを検するに及びて、心の臓と舌との間に何等の通傳をもみいださざりしことなり。

媚婦が口にいふ所は一もまごころより出でずといふ意。諷刺のいと婉曲にして、ままらざるうちに、そのつから他を慚死せしむる力あるを味ふべし。

*We could not but take notice likewise, that several of those little nerves in the heart*

*which are affected by the sentiments of love, hatred, and other passions, did not descend to this before us from the brain, but from the muscles which lie about the eye.*

同じく注目せざるを得ざりし事は彼の戀慕、怨惡、及び其の他の情慾の爲に動かさるゝ心臓神経の種々が、我が前なる此の物にありては、腦髓よりは來たらざして、眼邊の筋肉より來たりしこと是れなり。

媚婦が愛慕、怨惡等は、すべて分別、智慮の結果にあらずして、目に見たる醜美の感覺にのみ基くといふ意。

*Upon weighing the heart in my hand, I found it to be extremely light, and consequently very hollow, which I did not wonder at, when, upon looking into the inside of it, I saw multitudes of cells and cavities running one within another, as our historians describe the apartments of Rosmond's Bower.*

手をもて心臓を量り見るに及びて、予は、その甚しく輕やかなること、隨うていと空虚なることをもさとりぬ。そをば訝しとも思はざりき、何となれば、その内腔を檢するに及びて、我が歴史家等が叙状せる彼のロザモンド姫が林亭の秘



房のやうに、次第に内部に重疊せる無數の胞腔を見つればなり。

▲「ロザモンド姫」は英國王ヘンリー二世の寵姫なり、王其の皇后の嫉妬をおそれ、一大林園中に人知らぬ林亭を設け、そこに姫を棲ませたり、件の林亭の建てかたはいといと不思議なるものにて、譬へば八重襷のやうに造られたり、いにしへの飛驒の匠や物しけんと思はるゝばかりに、室内にまた室ありて入れどもくまことの奥の間に達することなし、すなはち稀有の迷殿なり、故に彼方にて「ロザモンドの林亭」といへば、我が國の「八幡知らず」などと同じ義に解せらるゝ也。こゝにては媚婦が心底の變幻窮なくして端倪すべからざるに喩へたり。▲胞腔は胞と腔と、別にして見るべし、共に解剖學の語、胞の形したるもの、腔の如く凹みたる處といふ義。

Several of these little hollows were stuffed with innumerable sorts of triles, which I shall forbear giving any particular account of, and shall, therefore, only take notice of what lay first and uppermost, which, upon our unfolding it, and applying our microscope to it, appeared to be a flame-coloured hood.

此の種々の空處は、無數の器具類もて充たされたり、その詳細なる説明は、こゝ

に物することを忍ぶべければ、只最上部にまさきに横はれりしものゝみに注意を下さん、そは開き展べて、顯微鏡を應用するに及びて、火炎色の帽子なりと見られき。

▲「火炎色の帽子」とは當時の風流女等の好みて着用せりし帽子也。火炎色とは橙色のヤ、赤味の勝ちたるをいふ。かゝる媚婦等が念頭に來、往せる事は、總じてタハイもなき事のみなり、美しき衣裳着たし、流行の帽子かぶりたしなどいふ念のみなりといふ意。帽子の色を火炎色といへるは男をたらし、して焦れさせんと思ふ下心を諷示せるなりといへる説あり、いかんや。

We were informed that the lady of this heart, when living, received the addresses of several who made love to her, and did not only give each of them encouragement, but made every one she conversed with believe that she regarded him with an eye of kindness:

聞く所によれば、此の心臓の主たりし婦人は、世に在りしころ彼れを戀ひ慕へる種々の男等のいひ寄れるを聴きて、其の人々の皆に末頼もしう思はしめしのみか、かりにも相語りし人皆をして、此の姫、我れに情ありと信せしめきと。



▲此の姫我れに情あり云々原文には情深き目もて我れを見るなりと信せしめきとあり同義也。媚婦が口なきほきは誰れにも愛想なきをいふ。

for which reason, we expected to have seen the impression of multitudes of faces among the several plates and foldings of the heart:

さるからにわれ人ともに此の心臓の種々の褶折目の間には面の數百萬の印象を見るならんと待ち設けたりしに、

but, to our great surprise, not a single print of this nature discovered itself, till we came into the very core and centre of it.

大案外にもさるたぐひの印跡は其の心核に達しにしまては只一つだにあらはれざりき。

媚婦は何人にも情ありげにもてなしたりといへば其の意中の人の無數なりしは思ひやらる。さすれば一定其の心臓面には無數の戀男の面の印銘せられてあるべしと豫期しつるに取調の結果は案外なりきとの意。

We there observed a little figure, which, upon applying our glasses to it, appeared dressed

in a very fantastic manner.

さてそこには(心核に)一のちよやかなる人の姿を見たり眼鏡を應用するに及びてそはいと嗚呼なる風体(ふうたい)に服装せりと見えにき。

The more I looked upon it, the more I thought I had seen the face before, but could not possibly recollect either the place or time;

そをながむればながむるほど前に見し面なりと思ひけれどいつことともいふともさちもひらいてちりし程に、

when at length one of the company, who had examined this figure more nicely than the rest, showed us plainly by the make of its face, and the several turns of its features, that the little idol which was thus lodged in the very middle of the heart, was the deceased beau, whose head I gave some account of in my last paper.

竟に餘人よりも一層綿密に件の姿を取調べをりし列席者の一人が其の面の格好と其の容貌の種々の特質とによりて明白に證示しけらく此の心臓の眞中心にかく安置せられたる小やかなる本尊は予が往ぬる日の紙上に語りし



彼の頭腦の持主なりし故伊達男に外ならずと。

浮薄婦人が唯一の意中の人は故伊達男なりと結びたる筆つきをいはず老成なれど訓釋しては世の旨味もなしよく原文を咀嚼して其の緯々たる韻諧の餘韻を知るべし。

As soon as we had finished our dissection, we resolved to make an experiment of the heart, not being able to determine among ourselves the nature of its substance, which differed in so many particulars from that of the heart in other females.

解剖を終りしややがて人々は此の心の臓を試験すべしと決定しき蓋し他の女性の心の臓とは夥多の要點に於て異なる此の心の臓の本質をば理論にては到底決論しかねし故なり。

▲ among ourselves 云々とは異論紛出して一決しかねたりといはんほどの義。▲ 試験すべしとは化學的實驗を行ふべしと云ふ義。

Accordingly we laid it into a pan of burning coals, when we observed in it a certain salamandrine quality, that made it capable of living in the midst of fire and flame, without

being consumed, or so much as singed.

かゝりければ予等はそを炎々たる石炭の皿のうちに置きぬその時一同は觀察せり此の心臓には一種山椒魚的性能ありてたとへ火焰の真中まなかにあるも焼き盡くさるゝことなくはた焦やさるゝことだになく依然として生存し得べき性質あることを。

これも浮薄女子が心の冷やかなるをいふ也又其の情熱の爲に我れを忘るなどいふこと無きを刺る。こゝに火焰といふは専ら戀情の切なるを指す。

As we were admiring this strange phenomenon, and standing round the heart in the circle, it gave a most prodigious sigh, or rather crack, and dispersed all at once in smoke and vapour.

人々が此の奇なる現象に駭歎して件の心臓の周邊に環立してありし折からそはいとよろろしきうめき聲否むしる破るゝ如き響を發しつさて突然と煙と化し湯氣となりて入散しき。

This imaginary noise, which methought was louder than the burst of a cannon, produced



such a violent shake in my brain, that it dissipated the fumes of sleep, and left me in an instant broad awake.

予が(夢心に)大砲の響よりもすさまじと覺えし此の架空の物音は、我が頭腦にいと激しき振蕩を生ぜしかば、眠の霧はたちどころに消散し、予はやがて全く目ざめき。

醒め來たれば南柯の一夢といふ結末は平凡なれど、前以て夢と斷りたるだけに大人びたり。總じてアチソンの諷諧は、其の筆致と共に、從容としてせいこまじからざる所に不可言の妙あり、一々は品評せず、また品評せんとするも能ふまじき也、看ん人之れを諒せよ。

・扇子の使用法

Exercise of the Fan.

此の一篇は前の二篇にひとしく頗るよくアチソンが婉曲なる諷刺を表示するに

足るものなり。其の旨意は、當時の上流婦女が時尚の扇子を弄びて媚惑の具とし、種々の妖態を事とせるを笑へるなり。すなはち是れも媚婦を諷刺したる文章也、前に釋したる文と相照らして味は、所謂媚婦の情態を髣髴するに足るべし。總じて本文中に見えたる諸般の舉動は、いさゝか誇張して寫しだされたれど、要するに、當時の貴女等が實際相ひきゐるて行へりし所にて、一として寫實的ならざるはなし、同代の人が此の文を読みし時には恰も文化、文政の江戸市人が京傳、三馬等の諷刺文を読みし時とほゞ同様の興を感ぜしなるべし。されども其のころの時様を知らずして只文字のまゝに卒讀しゆかば、或は何等の妙味をも感ぜざるべきか、こは蓋し諷俗文の多少まぬがれがたき不幸なるべし、而も予が前段に説明せる所によりてアチソンが文章の特質を了解し、十八世紀の風俗を追想し、而して善く此の文を味はば諷刺文の極意を研究するに於て裨益する所尠からざるべし。原文は例の如く平易雅淡、表はあくまでも眞面目にして裏には洒脱の滑稽あり、而して諷刺の間殆ど些の惡意をもさしはさまざる所、實に此の作家の特得なり。

I do not know whether to call the following letter a satire upon coquettes, or a



representation of their several fantastical accomplishments, or what other title to give it; but as it is I shall communicate it to the public.

予は左の寄書を媚婦メイトウに於ける諷刺と名くべきか、又はろが種々の嗚呼なる藝術の記事と呼ぶべきかはた如何なる名稱を與ふべきか知らず、され只ありのまゝに世に示さむ。

『メックテートン』の主筆として勿躰ぶり、大人ぶりの口吻いとをかし。みづから物したるを寄書のやうにもてなして、かくは前書したるなり。

It will sufficiently explain its own intentions, so that I shall give it my readers at length, without either preface or postscript.

その旨意はちのづから明かなるべければ、序も附書もせて、全文を讀者に供すべし。

此の前書の口真似ならねど、本篇は文章平易にして、旨意もほと／＼明かなれば、成るべく細釋を略き、又評言をも省くべし。

“Mr. Spectator,

“Women are armed with fans as men with swords, and sometimes do more execution with them.

觀察者足下 女子の扇をもて武器といはし候ふは男子の劔に於けると一般の儀に候へども、而も時としてはそれをもて一層の殺傷をいたし候ふとあり。婀娜たる女子が一本の扇子を利用して頻に媚態を凝らすときは男子の惱殺せらるゝもの數を知らずといふ意を四角ばつていひてたるところ、例のをかしみ也。

To the end, therefore, that ladies may be entire mistresses of the weapon which they bear, I have erected an Academy for the training up of young women in the Exercise of the Fan, according to the most fashionable airs and motions that are now practised at court.

かるが故に予は婦人たちをして其の携ふる武器の完全なる達人たらしめん爲に、方今宮中にて行はるゝ最も时尚的なる風格作法によりて年少なる女性達に扇子の使用法を傳授せんと欲し、一の學校を設立いたし候。

扇子を弄して媚を街ふことの上流女子社會に流行するを諷刺せんとして扇子使用法學校を設立せる者の廣告を擬造し來たる、奇想といふべし。

フナマンの風刺文



The ladies who carry fans under me are drawn up twice a day in my great hall, where they are instructed in the use of their arms, and exercised by the following words of command:

Handle your Fans,

Unfurl your Fans,

Discharge your Fans,

Ground your Fans,

Recover your Fans,

Flutter your Fans.

予に就いて扇子を携ふる婦人たちは一日に二度予が家の廣堂に排列してその武器の用を學び且つ左の號令によりて傳習に従事することに御座候。

扇を把れり

扇を開けり

扇を發射せり

扇を攜けり

扇を復せり

扇をはたしめり

By the right observation of these few plain words of command, a woman of a tolerable genius who will apply herself diligently to her exercise for the space of one half year, shall be able to give her fan all the graces that can possibly enter into that little modish machine. これら少許の平明なる號令を守り候はゞ凡そ半々年間その練習に勉勵せん相應の才ある女子は必ずや其の扇に此の小やかなる風流器の領し得べく一切の妙趣を與へ得べく候。

以上のづれも根も葉も無きことらへどとなるをいかにもまことらしく尤らしく眞にさる講習所出來たるかと思はしむるやうに物したる筆つき老練なり。尙以下の記事を熟讀せば諷刺の趣味次第に瞭然たるべし。

"But to the end that my readers may form to themselves a right notion of this exercise, I beg leave to explain it to them in all its parts.



さりながら讀者諸君をして正しく此の練習の旨を解せしめんが爲に、希はくは更に詳細なる説明をなすことを許容せられたく候。

When my female regiment is drawn up in array, with every one her weapon in her hand, upon my giving the word to Handle their Fans, each of them shakes her fan at me with a smile, then gives her right-hand woman a tap upon the shoulder, then presses her lips with the extremity of her fan, then lets her arms fall in an easy motion, and stands in readiness to receive the next word of command.

我が女隊がさのく其の武器を手にして整然と排列いたし候ふや、予が扇を把れいと號令するを合圖にさのく一齊に嫣然と打笑み、予に向かひて扇を打揮り、それが右手なる女子の肩をそと打ち、さてさのく扇の端もて一齊にそが唇頭をさへやがてまなやかに武器を下して次ぎなる號令の掛けらるゝを相俟ち候。

當時宮廷若しくは盛會の席に臨めば、恰もかくの如き光景を見ることが常にありし也。彼等貴婦人等はもとよりいひあはせて講習したりしにはあらねど、流行の自然の結果として、殆どいひあはせたらんやうに同じさまの媚態を物せり、平生講習などせるにやと思はるゝばかりなるが、かたはら痛さに斯くは訓練に擬して刺れるなり。

All this is done with a close fan, and is generally learned in the first week.

以上はすべて閉ぢたる扇をもて物することに御座候而して、最初一週日間に習ひ得るをもて通例といたし候。

再釋すれば以上の使用法などは、如何なる交際なれぬ少女にても、苟も交際場へ出て來るほどの者は行ふ所なれど、以下の巧妙なる嬌態に至りては、老練の媚婦にあらざれば能し得ぬところといふ意。これより以下の文、尤も作者の特色を現す。

"The next motion is that of Unfurling the Fan, in which are comprehended several little darts and vibrations, as also gradual and deliberate openings, with many voluntary fallings asunder in the Fan itself, that are seldom learned under a month's practice.

その次ぎは扇をひらく法に御座候、此のうちには種々の細き振りかた、顛はせかたなども含まれをり、又次第にゆるく開く法、かねては自然にハラ〜と



開かする法なども有之候。これは一ヶ月間の實習にて習ひ得ることは稀に候。  
 This part of the exercise pleases the spectators more than any other, as it discovers on a sudden an infinite number of Cupids, garlands, alters, birds, beasts, rainbows, and the like agreeable figures, that display themselves to view, whilst every one in the regiment holds a picture in her hand.

此の段の練習は他の何れよりも觀者を悦ばすること一層に御座候。蓋し突如として無數の戀の神、花かつら、祭壇、鳥、けもの、虹、さては同じたぐひの面白き畫どもを發現いたし候ふが故なり。こは隊伍中の各人が其の手に一畫圖を持する間、一時に目前に顯はるゝ所に御座候。

戀の神以下は、扇面に畫きたる畫様をいふ。戀の神はキューピッドといふ盲目裸躰の童神なり、手に弓矢を携ふ。此の矢にあたるものは戀慕の關に迷ふとなり。此の神を盲目としたるは戀の闇といふ比喻なり。▲祭壇或は供物壇とも譯す、神に供物をそなふる時に用ふる机又は臺をいふ。

“Upon my giving the word to Discharge their Fans, they give one general crack, that may

be heard at a considerable distance when the wind sits fair.

さて扇を發射せしむの號令を與へ候ふや、彼等は一齊に轟然たる響を發し候、これば風向よろしき日などにはいみじく隔たれる處にても得聞かるべく候。

This is one of the most difficult parts of the exercise; but I have several ladies with me, who at their first entrance could not give a pop loud enough to be heard at the further end of a room, who can now Discharge a Fan in such a manner, that it shall make a report like a pocket-pistol.

此の段は使用法中のいとくむつかしきもの、隨一に候へども、予が門下なる若干の婦人は、其の入門の當時には、室の極端にて聞くに足らん音をだに得成さず候ひしが、今は懷中ピストルのやうなるいみじき物音を成さん程に能く其の扇を發射し候。

扇子を使用することに熟れたる者が半無意識にして物する種々の媚態を、物々しく教授するやうに説き來たる所、此の諷刺文のをかしみ也。▲轟然たる音とはバチリといふ音なり、我が國人が扇を開閉してバチリと音をすると同様の所爲に



て、煙草を吸ひなれたる者が指頭にて煙管を弄ぶたぐひなるを、それを整古せでは叶はぬことのやうに物々しく説けるゆゑにをかしみ生ず。此の般諷諧のあぢはひは、玩味してみづから知るべし。

I have likewise taken care (in order to hinder young women from letting off their fans in wrong places or unsuitable occasions) to show upon what subject the crack of a fan may come in properly.

予はまた(おらぬ場處さてはふさはしからぬ場合に、若き婦人の扇を發射するをといめんとて)扇の憂然は如何なる事柄に適當するかを頗る留意して教示いたし候。

按ふに、當時の婦人等が扇を鳴らししは幾分か呼號の氣味ありしなるべし、例へば他の服裝をそしる時、又は看一看せよ、あの人の風采は可憐ならずやとか、又は其の他何事かを相知らせん爲に扇を鳴らししことあるべし。然るに交際なれぬ若き婦人などは、かゝる例を知らず、只人真似に意味も無く扇を鳴らすことあり、かくては上流の風儀に叶はずと、例のまかつめらしく教授の二ヶ條としたるがをかしみ

なり。

I have likewise invented a fan, with which a girl of sixteen, by the help of a little wind which is enclosed about one of the largest sticks, can make as loud a crack as a woman of fifty with an ordinary fan.

予はまた新一扇子を工夫いたし候、その最大なる骨の一には少許の風を含ませ置き候へば、十六歳の少女もその助によりて尋常の扇をもてる五十歳の婦人のに同じきすすき響を發し得べく候。

此の段はさほどに扇を鳴らすことが大切なる時尚ならば、寧ろ器械をかけたの扇子を用ひなば手輕なるべしといふ意を婉曲に物したるなり。

"When the fans are thus discharged, the word of command in course is to Ground their Fans.

扇のかく發射せられ候ふや、次ぎに來たらん號令は扇を擱けしにて候。

This teaches a lady to quit her fan gracefully when she throws it aside, in order to take up a pack of cards, adjust a curl of hair, replace a fallen pin, or apply herself to any other



matter of importance.

こは婦人たちが骨牌の一種を取りあげ、又は愛敬毛を整へ、又は落ちたる留針を元の如くし、さては其の他あらゆる緊要の事をもとせん爲に扇を傍へ投げやる時をまなやかに物するの法を教ふるものに御座候。

輕々貴婦人等が媚態をかぞへ來たる所却りて妙。緊要の二字全幅を飄し得て輕妙。

This part of the exercise, as it only consists in tossing a fan upon a long table (which stands by for that purpose) may be learnt in two day's time as well as in a twelve-month. 此の段は只態致よく其の扇を豫め其の處に置かれたる長卓子の上に投ずるに過ぎざれば十二ヶ月間にては將た二日間にては習ひ得らるべく候。

“When my female regiment is thus disarmed, I generally let them walk about the room for some time; when on a sudden (like ladies that look upon their watches after a long visit) they all of them hasten to their arms, catch them up in a hurry, and place themselves in their proper stations upon my calling out Recover your Fans.

我が女隊が斯く素手と相成りたる時予はまばらく彼等をして室内を逍遙せしむるを通例といたし候、やがて突如として猶彼等が長坐の後急に其の懷中時器を見るがごとく一同急ぎ走り戻り、あわて、其の武器をとらへ、さて予が扇を復せいと呼ぶに及びてものゝ其の正當の位置に復し候。

此の段はた時向を直寫す、當時の婦人等がいひ合はせたらんやうに自然に行へる所を取りて修練の後に行ふこととせるがをかしみ也。

This part of the exercise is not difficult, provided a woman applies her thoughts to it.

此の段の修練は心を用ひて習ふときをむづかしくものにならち。

“The Fluttering of the Fan is the last, and, indeed, the masterpiece of the whole exercise; but if a lady does not mispend her time, she may make herself mistress of it in three months. 扇をはたかかすることは最後の法にして實に全修練中の奥ゆるしに候へども、若し時をむだにせずして學習いたし候はば、多分三ヶ月内にて通達し得らるべく候。

I generally lay aside the dog-days and the hot time of the summer for the teaching of



this part of the exercise; for as soon as ever I pronounce Flutter your Fans, the place is filled with so many zephyrs and gentle breezes as are very refreshing in that season of the year, though they might be dangerous to ladies of a tender constitution in any other.

予は通例狼星日及び夏の暑き間をば此の部の練習に取りのけち候其の故如何となれば予が扇をばたかせいと命じ候ふや否やあひたゞしき微風と涼風と忽ち室内に充滿いたし候儀ゆゑ暑き時候にこそ頗る爽快なるものに候へど他の季節には或は孱弱き體質の婦人などに危険これあるべくやとぞんぜられ候ふためなり。

危険の二字點じ得て妙。

“There is an infinite variety of motions to be made use of in the Flutter of a Fan: there is the angry Flutter, the modest Flutter, the timorous Flutter, the confused Flutter, the merry Flutter, and the amorous Flutter.

そもく扇のはたきかたの儀は實に千差万別にして其の用法くさく有之候例へば腹立たしげなるはたきかた温淑げなるはたきかた怯けたる

かたあどつき狼狽へたるかた嬉しく樂しげなるかた情ありげなるかたなど。 Not to be tedious, there is scarce any emotion in the mind which does not produce a suitable agitation in the fan; inasmuch, that if I only see the fan of a disciplined lady, I know very well whether she laughs, frowns, or blushes.

簡短に申候はんに凡そ人心の感動にしてそれに適當せる搖動を扇子に現せざるものは殆ど無之候例へば手などは斯道に熟練せる貴婦人の扇だに一見いたし候へば其の人笑へるか、顰めるか、將た赧顔せるか、容易に判知し得る程に御座候。

婦人等が其の場の体裁をつくらふため俗にいふてれかくしの爲に扇を利用する鹽梅を極めて婉曲に諷刺せるなり。平安朝の貴婦人等が如何に檜扇を利用せしかを想像せば思なかばに過ぐるものあらん。

I have seen a fan so very angry, that it would have been dangerous for the absent lover who provoked it to have come within the wind of it; and at other times so very languishing, that I have been glad for the lady's sake the lover was at a sufficient distance from it.



予は嘗て甚しく立腹したる扇を見て候ひしが、そは此の珍事の原となりし不在の情郎が、若し其の風下にちかづき候はば、頗る危険なるべしとぞんぜられし程なりき。又嘗て觸らば落ちんやうにいとく力無げなるをば見受け候ひき、されば予は其の婦人の爲に、あはれ其の情郎たらん人の遙かに隔たりてあれかしと祈り候ひき。

人を主とせず扇を主としたるは妙也、諷刺の婉曲を味ふべし。▲ *Languisht* はいとく力無げなるをいふ。かゝる折には男心の癖として間々自惚心を起こし、此の女我れに情ありなど思ふならひなれば、當の婦人が思はぬ迷惑を蒙ることあるべし、其の情郎たらんもの、傍にゐぬこそ當婦人の爲なるべけれとなり。此の解はアイトン氏の解に據りたるなれど、尙聊かうなづきがたき節あり。或は *Languish* を單に力無げに譯して、愁然たる婦人の形容とせば如何。さすれば此の一句の解下の如くなるべし。曰はく、予は此の婦人の情郎のあたりにあらざらんを願ふ、何となれば若しかゝる折に情郎來たらば此の婦人或は得忍びかねて稠人中をも願はず如何なる愁歎場を現出し來たらんも圖りがたければなり云々。尙再

考すべし。

*I need not add, that a fan is either a prude or a coquette, according to the nature of the person who bears it.*

申すにも及ばざる儀に候へども、扇は其を携ふる人々の品質次第にて、貞女ともなり、娼婦とも相成候。

又人を主とせずして扇を主とす、諷刺文の本領。▲ *prude* とは娼婦の反対、力めて行儀を粧ひ貞淑を粧ふ女をいふ。必ずしも褒美の稱にあらずと知るべし。但し女の品格を上下するは女自身の爲人であり、扇に罪もなく咎も無しと、扇の爲に餘地を存したる筆致、何でも無きことのやうなれど老成の筆法なり。

*To conclude my letter, I must acquaint you, that I have from my own observations compiled a little treatise for the use of my scholars, entitled, The Passions of the Fan, which I will communicate to you, if you think it may be of use to the public.*

さて終に臨みて諸君に申しあぐべきは、予は自身の觀察に基きて門弟等の用にとて「扇子の情欲」と題したる一小論文を編纂いたし候ふが、此の書の若し



世間にも入用あるべしと思し召され候はゞ、予はそを諸君にもお傳へ申すべく候。

I shall have a general review on Thursday next, to which you shall be very welcome if you will honour it with your presense.—“I am,” etc.

(又次の木曜日には總ざらへを行ひ候ふ筈に有之候諸君若し臨場の榮を賜はり候はば、謹みて歓迎仕るべく候。某頓首。

▲I am, etc. は彼なたの書簡文例, etc. は等の義、予は足下の順候云々の語を略したるなり。こゝには某頓首と義譯せり。

“P. S.—I teach young gentlemen the whole art of gallanting a fan.

追啓 予はみやびやかに扇をやりとりするの全法をも年少の紳士がたに教授いたし候。

婦人に對する諷刺一轉して年少紳士に及ぶ輕妙。P. S. は羅句語 post scriptum の略「追啓」の義。

“N. B.—I have several little plain fans made for this use, to avoid expense.”

注意 費用を節するため無地の扇いろく備へ置き候。

一結妙といふべし。總じて流行、時尙は驕奢を衒ふを主とするものにて費用の題は提出すべからざる筈なるゆゑ、此の一句矛盾を極む、隨うてをかしみ一倍す。讀者よく此の一文を通讀再讀せば、諷諧の本意を會得するに庶幾からん。▲N. B. は nota bene の略「善く注意せよ」の義。



## 評釋の六

## ウオヅナオスの抒情詩

其の詩題の斬新なる、其の思想の温雅なる、其の觀念の深邃なる、其の詩人の天職を意識せる等の點に於いて、英國詩界の革命家と崇められ、一時はブルテール、ポープ、シルレル、レンシング等をすら凌駕すとまでに稱へられ、ウイリヤム、ウオヅナオスは西紀元一千七百七十年英國カムベアランド州なる一村に生まれ、同八百五十年に逝りき。彼れは幼きより多情多感にして自信の念頗る強かりき。後年其の甥の需めに應じて自家の經歷を叙せる文中の一節にいはいはく、我が母常にいはれたるは我が子等五人の中ウイリヤムばかり生ひさきの心にかゝるはなし、彼れは善事にてか悪事にてか遂にいぢるきものとなりぬべしと。母をしてかばかり心を痛めしめたりしは我が心の執拗に、氣まゝに、過激なりければなり。今だに肥臆す、ペリスなる祖父の家に往きける時、かりそめなる侮辱を受けたるより自殺せんと企てしが、白刃を見るに及び心おくれして止みき。また或時、兄リチャードと同じ家に

行き、客の間にて獨樂を弄ひし折壁上にかかけ並べたる家族の畫像を見、兄に向かひ、其の一を指して、御身鞭もて此の婦人の像を破らずやといふに、兄否みければ、我は直ちに鞭をあげて、其が下着のあたりを貫きたり、云々と。執拗と云ひ、氣まゝと云へば不徳に近けれど、其の多感にして自信強き氣質は、既に當時に現はれたりと云ひつべし。其の多感なるは、よく凡べてに同情して貴となく、賤となく、事物の中に生命を見出だし、所以、其が自信の念強かりしは、時流に超越し自家の天職を確守して、勝を最後に期せし所以なり。

按ふに、ウオヅナオスの大なる所は、深く詩人の天職を意識して生涯を詩に捧げたるに在り。先人の卑とし小とし細として筆を着くるに及ばざりし、寧ろ着くる能はざりし、自然界、人間界を描寫して、其の美處を看取し發揮したるに在り。彼れはポープ等がわざとらしき擬古彫琢の風に反對して、現實に則り、活語を用ひたりしが、毎に清高なる韻致ありて、淺露粗笨に陥らざりき。自然に歸れといふ時世の呼聲に和しながら、バイロンの如く、破壊に終らずして、能く自然主義を建設せしは彼れなり。他が粗笨とし枯燥なりとする事物を取りて、彼れは之れに與ふるに耀々



たる靈を以てせり。一片の花、一滴の水、賤の女、乞食の童、一として彼れが涙に値せざるはなく、且つ其の之れを描くや、平易茂樸うち見たる所、一の藏する所なきが如し、まかも沈思黙誦、其の神に會するに及べは、津々たる幽趣、掬へども盡きざる概あり。是れ蓋し其の思想の高雅にして其の同情の涙の遍く渡がれたればなるべし。彼れ會て云へらく、大なる詩人は凡べて教師なり。余は教師として尊ばるゝか若しくは何者とも思はれざらんことを願ふと。

ウオヅヲオスは、到底抒情詩人なり、劇詩の作としては劇<sup>ドレマ</sup>としても詩<sup>メテ</sup>としても見るに堪へずと評せられたる。“The Borderers”といふ悲劇あるのみ。

彼れが著作多けれども出版の當時に好評を博せしは絶えてなし。彼れが最大傑作の一なりと評せらるゝ“*The Excursion*”すら出版の當時には批評家キニフリー之れを爲すなき歌作なりと嘲り、ベイロン亦た眠たく煙たき詩にして余の厭ふ所と罵りき。詩人の不遇なるウオヅヲオス如きは稀なり、而してかゝる不遇の間に立ちてその天職を確守せしは更に稀なり。

ウオヅヲオスが抒情の作中、多く人の知りたる

“We are Seven.” 【我等は七人なり】

“Lines composed a Few Miles above Tintern Abbey.”

【チンタマン精舎の數哩ばかり上にてものせる詩】

“The Fountain.” 【泉】

“Michael.” 【マイケル】

“To the Daisy.” 【ひな菊に】

“The Solitary Reaper.” 【只ひとり麥刈る少女】

“To the Cuckoo.” 【子鳥に】

“She was a Phantom of Delight.” 【かれは悦樂の影なりき】

“Ode to Duty.” 【本務に與ふ】

“Laodomeia.” 【ノーオタマイア】

“To a Skylark.” 【奇天子に】

“Sonnets composed upon Westminster Bridge.”

【ウエストミンスタア橋上にてものせる小歌】



“Lucy Gray” “ハーシー・クーパー”

“Intimations of Immortality from Reflections of Early Childhood.”

『幼時を憶うて不死を知るの歌』

又長篇の名高き

“The Excursion.” 『漫遊記』

“The White Doe of Rylstone.” 『ライルストーンの白鹿』

など此等の諸篇いづれも傑作として數へらるゝものの中に就きて“*The Excursion*”は九章より成り、白鹿の詩は七章より成れる長篇にして前者は經營慘憺の作、ウオヅヲオスの人物及び心的生涯は躍如として其の中に現せりと稱せらる。但し彼れが作の普く愛誦せられて人口に膾炙せるは短篇なり。詞意共に清楚溫雅、題を卑近に取りて清高幽遠の意を寓せる所、何れもウオヅヲオスの特質を表はせり。

呼子鳥に

To the Cuckoo.

「呼子鳥に寄する歌はウオヅヲオスが小品中の佳作にて、此の作者が殊なる詩想を窺ふべき好階梯たり。」

さて詞句の評釋には要無き事に似たれど、*cuckoo*の解に關して少しく辯ずべき事あり。從來 *cuckoo* は音の似たるまゝに郭公と譯して杜鵑のこととしたれど、支那にて郭公といへる鳥は果して杜鵑と同一なりや否や。又支那にて謂ふ郭公と西洋にて謂ふクックーと同一なりや否や。ウオヅヲオスなどの作によりて按ずれば、頗る疑はしきふし無きにあらざる。

ほととぎす(杜鵑)は一名を怨鳥ともいひ、夜啼達旦、血漬草木、凡鳴皆北向とも見え、子規、杜宇、蜀魂など異名す。又曰はく、杜鵑大如鶴而羽、鳥其聲哀而吻有血、土人云、春至則鳴聞其初聲則有離別苦、人惡聞之云々と。又曰はく、形すゝみだかに似て、背はうすくろく、腹は白し、また腹にも翅にも白き斑ありて、口の中赤く、頭に豎の毛おひたり、また足はあをばみて、前の指のまたに薄き皮あり、此の鳥みづからは、巢をつくらずして、鷹の巢をかりて棲む云々(辭林)と。

さてかなたのクックーとは如何なる鳥かと見るに、曰はくクックーは *euclidæ* と呼ぶ







あはれ 舞しげなる新客よ 我れ(きこ) 聞かす  
O billie new-comer! I have heard,

(今も)聞かすよ(きこ) 鳥

I hear thee and rejoice:

あはれ 呼子鳥 汝れを(きこ)しむ(きこ) 鳥

O cuckoo! shall I call thee bird,

はた只 (きこ)く(きこ) 聲(きこ)と(きこ) 呼(きこ)ぶ(きこ) 声(きこ)

Or but a wandering voice?

あはれ 樂しげなる新來賓よ、我れ曾て汝が聲を聞きつ、

今もまた聞きてよろこぶ。

あはれ 呼子鳥 汝れをしも鳥とや呼ぶべき、

はた只 さまよへる聲とや呼ぶべき。

我れ幼きころ、屢々山野にそゞろありまして、樂しげに啼く汝れが聲に世を忘れ、我れを忘れ、恍として別天地に遊べるやうに思ひしこともありしが、立つ年波に人となりて浮世の塵垢に染みたる今も、尙汝れが聲を聞きてよろこぶ。あはれ、さるに

ても呼子鳥よ、聲ばかりして姿は見えぬあやしの鳥よ、汝れをしも鳥とや呼ぶべき、  
はた只處定めずさまよへる聲音とや名くべき。あはれ、つかなくも呼子鳥とを言  
此の一句にさしおこるからんや。

草の上(きこ)に臥(きこ)してある(きこ) 草

While I am lying on the grass,

な(きこ)二(きこ)き(きこ)だ(きこ)の(きこ)叫(きこ)び(きこ)聲(きこ)を(きこ) 我(きこ)れ(きこ)は(きこ)聞(きこ)く

The twofold shout I hear;

風(きこ)より(きこ)遠(きこ)く(きこ) (きこ)汝(きこ)が(きこ)聲(きこ)は(きこ)渡(きこ)る(きこ)と(きこ)ち(きこ)も(きこ)ほ(きこ)ゆ

From hill to hill it seems to pass,

且(きこ)つ(きこ)遠(きこ)く(きこ) 且(きこ)つ(きこ)近(きこ)く(きこ)

At once far off and near!

草の上に臥してある間、二きだの汝が叫び聲を我れは聞く、

このもかのもに、汝が聲は渡るとちもほゆ、

且つ遠く 且つ近く。

▲「二きだの叫び聲」とはクックーと毎に二聲づゝに段を附けて啼けばなり。



▲ seems ひかゝる 場合にははらひも「あもほゆ」又は「あもはる」と訓ぢべし。

回教無く只啼くはたと (春の谷に)

Though babbling only to the vale

うららかに日影をし花咲く(谷に)

Of sunshine and of flowers,

なが聲はまひへ 我はこは

Thou bringest unto me a tale

夢の日のむらじがたりを

Of visionary hours.

うらゝかに日影さし花咲く谷に、

何氣なく只啼くなれど春の谷に、

汝が聲は持來 我れには、

夢の日のわかしがたりを。

▲ babbling とは何の意味もなくつゞやくをいふ、小見のかたこと、の如きを指すことにては呼子鳥の啼く聲に何の意味も無げなるをいふ。▲ 汝の春の谷に向かひ

て啼くや何の意味も無げなれど、幼き折に汝が聲を聞きて無限の悦樂を感じし我れは、今も汝が聲を聞けば、未だ濁世の汚れに染まて夢の如く、幻の如く恍惚として樂しく暮らし、幼時の事どもを想起するなり。他人は知らず我が耳には汝れが「うらゝ」と啼く聲は、夢の現の昔がたりをもて來るやうに思はるゝこと也。

うらゝかに 春の谷に

Thrice welcome, darling of the spring!

今たに 汝はは 我はこは

Even yet thou art to me

まだよ 我の悦樂

No bird—but an invisible thing,

な、は、は なるは、は、は

A voice, a mystery.

やの回、は、は 夢の、は、は

The same whom in my school-boy days

我は、は、は 其の聲は

I listened to; that cry

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ



我れをこころよき願ひせしめし

Which made me look a thousand ways

くまのまに 木に 空に

In bush, and tree, and sky.

めづらしや、春の寵兒よ、今だにも我れは汝れをば

鳥としもあもほえず、目に見えぬ不可思議の物、

或奇しき聲音とこそあもへ。

小學校にありしころ、我が耳に聞きなれし、その同じ聲音とこそ思へ。

我れをしてそこかこゝかと、くさむらに、木に、空に、

幾たびもく見かへらしめし、その奇しき呼ばひとこそ思へ。

▲welcome とはよくこそ來ぬれの義、あなめづらしや、など珍客に對していふと同じ心なり。▲春のまなご、春のはじめに來、鳴く鳥ゆゑにいふ。▲今だにも云々、幼きころは汝の聲を天籁のやうに感ぜしことありしが、今尙其の感なきにあらず、我れは汝を鳥としも思はず、眼には見がたき物、一箇の不可思議物、一箇の不可思

議なる聲とこそ思へ、の意。

汝れを尋ねて 我れはまばへさまよひにき

To seek thee did I often rove

杜を 綠野を

Through woods and on the green;

而も常に汝は (我が爲の) 戀なりき、戀なりき

And thou wert still a hope, a love;

常に焦れて尋ねぬれども、一たびも姿は見えて。

Still longed for, never seen!

汝れを尋ねて 我れはまばへさまよひにき、

杜のなかをも、綠の野へをも、

而も常に 汝は我が爲の戀なりき、行末をちぎる聲たりしのみ、

常に焦れて尋ねぬれども、一たびも姿は見えて。

▲我が爲の豫望云々、いつかは相見るを得べしとたのまるゝのみにて、いつまでも姿を見ると能はざりきといふ意。▲戀なりき云々、我が爲の戀人なりきといはん

ウオオゾチオスの抒情詩



ほどの義。▲常に焦れて云々原文を直訓すれば常に焦れて求められたる而も會て見られざるとなる即ち分詞的形容句なり。この *seen* といふ語を常に「訓ずると尙と訓ずるとによりて意義いたく相違す注意すべし」。▲*hope* といふ語はた然り從來希望と訓じ來たりたれど妥ならず *hope* に願望の義いと譯し豫期「豫望」期待又は末のたのみなどの意勝ちたり殊に *I hope* 云々などの場合に於てはよもや云々ならんと思ふといはん程の義となれるが多し。

而も我れなが聲を

今も尙えきくなり

And I can listen to thee yet;

草原に打臥して

Can lie upon the plain

えきくなり(なが聲を) (ベツトリス)我が声の

And listen, till I do beget

とてたかりし極樂の其のふにしへに立還るまで

That golden time again.

而も我れ 汝が聲を 今も尙えきくなり。

草原に打臥して えきくなり汝が聲を、

そいろにも我が心の (なが聲にうかれ)て

めてたかりし極樂のそのいにしへに立還るまで。

我れ人となりてより世の塵垢に汚れたれど尙汝が聲に耳傾けて汝が奇しく妙な聲に心耳を澄ましむるを得るぞ嬉しき。草原に打臥して汝が聲に心耳を澄ませば我が心いつしかに名聞利慾の羈絆を脱して又も幼時に返る心地す絶えて五濁に汚されざりし人生の黄金期(幼時をいふ)に歸る心地す。▲*beget* again は復すの意再び手に入るの義本訓は意を酌みて物せり。▲*ウオオゾナオス* が幼時を追慕する念の切なるを「吾等は七人と照らし合はせて見るべし」。

あはれき等のゆかた 我ごとくからが歩む地も(なが聲をきくとかな)

O blessed bird; the earth we pace

又聲を

Again appears to be

あはれき等のゆかた

An unsubstantial, fairy place;

ウオオゾナオスの音



(目に見えぬ汝がふさはしのすみどころ)  
That is the home for thee!

あはれ幸鳥、汝が聲を聞く時は、我が歩む此の下界も、

又見ゆれ仙郷とも(をさなかりし折にあなじく)、

形なきまぼろしのいと奇しき里とも見ゆれ、

目に見えぬ汝がふさはしのすみどころ。

餘韻は必ずしも説くを要せざるべし。ウオヅナオスの自然を愛する情のいかに  
深く、いかに切なるかはク、ク、の呼ばふ聲にだに我れを忘れ、人世を忘れ、恍として  
別乾坤に遊べるに其の一斑を想見すべし。

幼時を憶うて不死を知るの歌

Ode on Intimations of Immortality from Recollections  
of Early Childhood.

此の高尙幽玄なる作は、なかばは一千八百〇三年に、なかばは同六年に成れり。い  
さゝか長きに過ぎたれど、此の作の由来に關する作家自身の註脚は此の詩を善解  
せんと欲する者の一讀すべき價値あれば、左に其の大要を譯出す。

こは予がクラスミヤなるタウンスエントに寓せりし折の作也。初の四解を  
物してのち、抄くとも四春秋を経て稿を繼ぎ、竟に完成するに至りたり。堪能  
細心の讀者は説かずとも予が意を知りたまはめど、さりとて此の作を物せし  
折の、予が特殊なる感情と閑歴とを語る、必ずしも無要ならじ。はじめ予が幼  
かりしや、如何にしても、死といふことの我が身上に来るべしと信ずる能はざ  
りき。予嘗て歌うて曰はく

あどけなきをさなご、輕やかに息づかひし、生ける氣を手、に足にもほ  
ゆるをさなご、など知らん、死てふことを。

と。予がかく思ひ込めりしは必ずしも動物的生氣の外に熾んなりしが爲に  
あらず、むしろ靈氣の内に制止すべからざるものあるを覺えたればなりき。  
以爲へらく他人は如何になりゆくらんと、予は彼のイノツク又はイライチ



ヤなどいふ古神仙にひとしく、生きながら羽化して昇天するを得べきなりと。かゝる感想を抱けりしからに、予はあらゆる外界の物象を見ても、そをば外部に實在せるものとしては見る能はず、否、彼等はた我が身にひとしき虚靈不思議なる物にて、我が身とは分離すべからざるもの、即ち我が一身と同躰同源のもの、やうに思ひたりき。されば小學校に通學せし途すがらも予は動もすればかゝる虚靈界に遊神して恍惚として我れを忘れ、やがて樹木又は塀牆などをひたとつかみて、辛くも我れに復りしと聞えあり。(中略) 按ふに幼時目睹する所の物象の夢裡に見る所の物の如く、且つ活ける如く且つ美麗なることは、人皆の容易く回憶し得る所なるべければ、予は今こゝに絮説するに及ばず、さもあれ予は此の事をもて人間に前生ありといふ事の證左なりと見做して此の作のうち物したれば、或は世の敬虔なる人々の誤解を招き、予はかゝる信仰を奨説せんとするなりと思はれんも圖りがたし、故に一わたり辯へべく要あり。蓋し、かゝる感想はいとゞ漠然たるものにて、靈魂不死に關する吾曹が本覺中の一原素たるのみ、敢て信仰として奨説すべきほどのものにあらず。

たゞし人間前生の説たるや彼の默示録中にも所見なしといへども、さりとて此れと衝突すべき記事もなく、且つや彼の「人祖墮落」の一事はほゞ此の前生説と相類する所ありて暗に此の説を補助する力あり。此の故にや人に前生ありといふ感想は、夙に諸國俗の念頭に入りて彼等の普く信ぜし所彼の希臘の碩學プラトンの説の如き、將た此の思想に胚胎せる由、古學を修めたる者の善く知る所なり。アルキミヂスは「我れ若し我が槓桿を据うべき處をだに得ば、世界を左右せんこと成しがたきにあらず」と。ものが心の世界に關して誰れか同様の感なからん。たまゞ興感に驅られて靈魂不死の歌を物するや、我れ我が心界の幾原子を敢て左右するの必要を感じつすなはち所謂前生説の頗る信ずるに足るを思ひ、之れを利用して以て我が作詩の礎となしにき云々。

原文や、晦澁譯文更に晦澁なれば、讀者或は其の要領を得るに困しまんか。要するに、ウオツチオスの此の作は幼時の淨懷を追慕するの切なるに成れり、而して其の思慕の由來を釋して所謂前生説に歸因すとなし、更に釋して靈魂の不死、不滅、な



るの理は幼時の感想に照らして争ふべからずとなせるなり。尙くはしくは詞句を釋するに及びて瞭然たるべし。

はじめて此の作の世にいてしや、當時批評壇に覇權を握りし「エチンペラ評論」の主筆記者チマフリーは難じて曰はく、「讀むべからず、解すべからず」と。他の文學雜誌「リテラリー、レチスタア」の記者は曰はく、「讀者をして不快を感ぜしめ、怒を發せしむるたはごと」と。蓋しウオヅオスの詩想は高遠幽妙にして、時尚にさきだつたと數十歩なりしが爲に、能く之れを解し得る者當時殆ど絶無なりしなり。かゝる幽玄の作なれば拙き訓釋などの力をもてして能く作意を表し得べしや否や、甚だ疑はしく思はるれど、讀者諸子の深切なる注意と相俟つことを得ば其の要旨ほどは傳ふるを得んか。

題に用ひたる Immortality との語は、作者の意にては eternity との義に用ひたるに似たり。彼れの意は不死といはんとするよりは、前生後生に亘りて無窮即ち永劫存在といはんとするにありたりし eternity の語は魔語に屬し、なりとて eternity との語はた妥當ならざる所あるゆゑ、止むを得ず immortality の語を填した

るものなるべし、即ち三世恒存といはん程の義に用ひたるが如し。

第一解

I.

昔し世なつか

昔時

世

流水

There was a time when meadow, grove, and stream,

世の川

なほそ昔の所

The earth, and every common sight,

世にこ

凡そ(昔なつか)

To me did seem

麗きをよし見せられたる(凡そ昔なつか)

Apparell'd in celestial light,

(同じ安ん)麗麗に凡そ終末極楽(光)に

The glory and the freshness of a dream.

今世の光と鮮しき

It is not now as it has been of yore;—

今世は昔の如し



我れいつかたに向かはん。

Turn whereso'er I may,

夜にもあは 昼にもあは

By night or day,

昔も見たりし其の物を

今はまた見る能はず

The things which I have seen I now can see no more!

牧場も杜も流水も 下界も森羅の万象も

靈しき光につつまれて 我れには見えし時ありき

たとへば夢裡に見る如く、清く尊くあざやかに。

(志かるに) 今はむかしと同じからず、

我れいつかたに向かはんも、夜にも昼にも、

むかし見たりし其の影を、今はまた見ることも能はず。

幼少の折には睹る物悉く靈光に包まれたるが如く見えたりしが、今は我が心塵垢に汚れたるが故にや、如何なる物を見るも舊の如くなる能はずと幼時の淨懐をなづかしく慕はしく思へるなり。▲夢裡に見る榮光云々は障に見えたる如く、さな

がら夢幻の景なりきといはん程の意更に悉しくいへば清く尊くあざやかに詠めたりし森羅万象の靈しき影のいつしか悉く消滅し去りたる、さながら樂しき夢の驚きさめて其の記憶の尙かすかに残れるが如し、即ち彼の幼時見し盛観は恰も夢裡に見る莊麗の景、清新の致にひとしかりきといふ意。▲of yore は「其のむかし」の義、即ち幼時を指してゐる。▲it is not now 云々の語は我に漠然と用ひたり、意味よりいへば、睹る所の万象といはんほどの義。

第二解

II.

直ぐ今も尚來たりまた往く

The rain now comes and goes,

(今も尚) 可憐なり 盛衰の法

And lovely is the rose,——

尙麗(はた) 可愛なり (今も尚)

The moon doth with delight

ワオオムチオムの好む時



其の四邊を顧盼し 兼て下界を去る

Look round her when the heavens are bare;

水(みづ)は 星(ほし)の夜(よ)に(今也)

Waters on a starry night

星(ほし)の夜の美(うつく)なり

Are beautiful and fair;

旭光(あしたひ)の産(う)まはる(は)は(今也)莊嚴(じやうげん)なり

The sunshine is a glorious birth;

而も尙 我(われ)は知る 今(いま)に往(ゆ)く

But yet I know, whither I go,

榮光(えいこう)の

此(こ)の下界(げ)より去(さ)りぬるを

That there hath passed away a glory from the earth.

虹(にじ)や今(いま)も尙(なほ)出沒(しゆつぼつ)し、薔薇(ばら)や今(いま)も尙(なほ)可憐(これん)なり、

月(つき)はた今(いま)も尙(なほ)嫺然(れんぜん)として 空(そら)晴(は)れたる時(とき)四邊(よっぺん)を顧盼(こぼろ)し、

星(ほし)づく夜(よ)の水(みづ)の色(いろ) (は)た舊(ふる)に依(よ)りて(艶)且(かつ)美(うつく)なり。

彼の旭日(あしたひ)の産(う)まれいづる 將(まさ)た舊(ふる)に依(よ)りて莊嚴(じやうげん)なり。

而も尙我れは知る、(今は)いづこに往くも、

榮光の 此の下界より過ぎ去りぬるを。

▲「虹や來たり又往く」とは虹の引き渡しまた消え去るをいふ。▲「嫺然として」云々、月を人に擬して其の麗しく四方八面に照り渡れるを美人の樂しげに打笑みてあたり打ながむるに喩へたるなり。▲「旭光の産れいづる」云々、原文には「日光(は)た榮光燦爛たる産出なり」とあり、即ち「太陽はた榮光の燦爛たること舊時の如くにして東山より産れいづる」義、東山の頂より旭日のはじめて昇る光景の莊嚴華麗なるをたゞへていふなり。▲「あはれ榮光の」云々、虹の美舊の如く、薔薇の美舊の如く、月の美水の美、旭日の美、すべて舊日と異なる所なければ、而も尙我れは知る、下界の眞壯觀の今は既に消失してまた之れを見るに由なきことを、云々の意。

第三解

III.

今(いま)也

榮光(えいこう)のかく樂(たの)しげなる歌(うた)をうたふ時

Now, while the birds thus sing a joyous song,

鳥(とり)は今(いま)も喜(よろこ)ぶ歌(うた)をうたふ時



And while the young lambs bound

As to the tabors sound,

To me alone there came a thought of grief;

A timely utterance gave that thought relief,

And I again am strong.

The catapults blow their trumpets from the steep,—

No more shall grief of mine the season wrong;

I hear the echoes through the mountains throng.

The winds come to me from the fields of sleep,

And all the earth is gay;

Land and sea

Give themselves up to jollity,

And with the heart of May

Doth every beast keep holiday;—

Thou child of joy,

Shout round me, let me hear thy shouts, thou happy

Shout round me, let me hear thy shouts, thou happy



多幸なる牧羊童よ  
Shepherd boy!

いでや衆禽のかく樂しげに歌へる時、見羊のかく嬉しげに踊れる時、  
 鼓の音色に伴れての如くかく樂しげに踊れる時に、  
 いと悲しき物思ひの、我れにのみこそ來たりぬれ、  
 さもあれ恰も好き機に、我が鬱懷を洩らしよかば、  
 其のむすばれし思ひも解けて、我れまた心すこやかなり。  
 今や許多の瀧津瀬も、峻しき崖の頂より(佳節知らせて)鳴り轟く、  
 我が身ひとつの悲傷の故に、豈に此の好季節を殘ふべけんや。  
 今や山彦も嬉しげに(山のかなたより)群り來たり、  
 風はた眠れる野面より、我がかたはらに吹き來たる。  
 全土驪然たり。陸地も海も  
 皆こぞりて嬉笑し、百獸はた五月の情を以て休樂す。  
 あはれ汝(汝)怡樂の見よ、呼ばへ、我が周邊に、

汝が叫ぶ聲を聴かせてよ、汝多幸なる牧羊童よ。

春風聆蕩の好季節、鳥獸皆怡樂す、我れひとり哀傷す、他無し、幼時の淨懷を喪失せるを哀しむなり。さもあれみづから心をはげまし、時いまだ後れざるうちに歌に鬱悶を洩らすことを得てしかば、胸宇爽然として我が心また強健なり。今や諸山の瀧津瀬も、断崖の巔より、翠々と振り落ちて、方に佳節を知らせ貌なり、我が身ひとつの悲傷のゆゑに、此の好季節を殘ふべけんや。いでや山川禽獸と共に、我れもまた嬉笑し、休樂せん。

▲諸山の瀧津瀬とはウオゾナオスが愛好せりし湖畔の諸瀑布を指す。▲喇叭を吹き鳴らすとあるは春來たりて水漲り瀧の盛んに落つる聲を喇叭に喩へたるなり。彼方にては喇叭は事を報ずる時に用ふ。▲山彦云々、山彦は古來彼方にては女體の神に擬する例なり、嚴冬の間は黙して幽谷に籠居し、春來たれば四面賑はしくなる故、其の歡聲に呼應して出て來たるとなり。▲百獸はた五月の情を以て云々、百獸の beast と云ふ語、breast (胸)の誤ならんといふ既ありと聞きしが、予が讀める三異本はいづれも beast とものしたり、且つや beast と讀みて意よく通ず。按ふに、

ウオゾナオスの呼聲詩



此の一解はむねと山水禽獸の春をたのしめる様を寫せるなれば、はじめにまづ諸鳥を詠じ、次に羊見を詠じ、更に他の獸に及ぶすなはち山野牧場に戯れ遊べるあらゆる畜類の上に及ぶ。百獸の語、次の牧羊童といふ語に相呼應して意義瞭然たり。▲五月の情とは陽春の情の義、五月は彼方にては尤も樂しき期節、我が彌生、卯月などに相當す。▲keep holiday とは「休樂すの義」。▲多幸なる牧羊童よ云々、陽春の候に當りて、尤も自然の好風光に怡樂せりと見ゆるもの禽獸に超えたるはなかるべく、又此等禽獸を管理して之れと共に無念無想げに逍遙せる春の野づらの牧羊童は見るからがいと樂しげにて、自然を愛する此の作家の艶羨措く能はざる所なるべし。

第四解

IV.

ふたしはあめなるをよみ　　あはれはあめなり  
Ye blessed creatures, I have heard the call

あめなるをよみ　　あはれはあめなり  
Ye to each other make; I see

あめなるをよみ　　あはれはあめなり  
The heavens laugh with you in your jubilee;

あはれはあめなり  
My heart is at your festival,

あはれはあめなり  
My head hath its coronal,

あはれはあめなり  
The fulness of your bliss, I feel—I feel it all.

あはれはあめなり  
Oh, evil day! if I were sullen

あはれはあめなり  
While the earth herself is adorning

あはれはあめなり  
This sweet May morning;

あはれはあめなり  
This sweet May morning;

あはれはあめなり



And the children are pulling,

On every side,

In a thousand valleys far and wide,

Fresh flowers; while the sun shines warm

And the babe leaps up on his mother's arm:—

I hear, I hear, with joy I hear!

But there's a tree, of many, one,

A single field which I have look'd upon,

Both of them speak of something that is gone:

The pansy at my feet

Doth the same tale repeat:

Whither is fled the visionary gleam?

Where is it now, the glory and the dream?

あはれいまし等多福なる衆生よ、我れは聞きぬ汝等の相呼ばふを。  
我れは見る諸天の嬉笑するを、歡呼する汝等の聲に和して。

(我れ將た汝等に同感して) 其の心汝等の祝祭に在り、  
我がかうべ將た汝等と共に、祝賀の冠冕をいたしく心地す。

汝等の盛福をあくまで我れは感ず、我れは悉く之れを感ず。  
あはれ忌々し忌々し、我れ若しひとり愁然たらば、

ウキポンチオエスの持詩



地だにもいと春めきて(千草の花のいろくに)

此のうつくしき陽春の あしたの野邊を盛飾すなるに。

またをさなきが(打むれて) 四方にはるけくたちいで、

果なき四方の山あひに、 けふあざやかに咲きいづる

千草の花を摘むなるに。 將た春日影温かに

母のかひなのみどりども 小躍りすなる折なるに。

あな思々し、思々し、 我れ若し獨り歎きしをらば。

(否々、我れもまた同嬉せてやは) 然り、我れは聞く、我れは聞くなり

(いまし等が相歎呼する聲々を)……………

とはい(心ばかりかくはやれども) (我が心今はいにしへの如くならず)

目に見る樹々は多かれど、 多きがなかに只一樹のみぞ、

打詠めたる四方八方の野は多かれども、 只一野のみぞ、 只此のふたつの

みぞ語るなる、

消えて跡かたなき其のいにしへの夢まぼろしの面影を。

我が足もとなる壺重の 語るもあなじき物がたり。

あはれ、いづこへ失せぬるぞや彼のまぼろしの靈妙光は、

あはれ、今はいづこにか在るぞ 彼の夢心地の壯觀は、

▲多福なる衆生云々、森羅万象を悉く活物視してかくは呼べるなり。▲諸天の笑

ふ云々、地上の万象の相歎呼するに和して天上界はたさいめき笑ふとなり。▲賀

冕をいたしく云々、いにしへ希臘羅馬の祝宴の席にては賀冕をいたしくを例とせ

り、其の古事によりてかくいへるなり。▲evil dayとは「不祥の日」と直譯す、意義は前

譯に見えたるが如し。▲とはいへ僅かに一樹あり云々、我れ強ひていにしへに立

還りて汝等と歎を共にせんと欲すれども、哀しきかなや、我が心既にむかしの心に

あらず、花を見るも、樹を見るも、山野、林泉を見るも、また彼のをさなかりし折の如く、

恍として夢幻の妙境に遊ぶこと能はず、多きが中に只一樹のみ、多きが中に只一野

のみぞ僅かに往時を想起せしむ、而も徒らに往時の怡樂の去りてまた復しがたき

をほのめかすのみ、我が脚下なる壺重の花の仄かに語るところ將た之れに同じ。

嗚呼々々幼時の淨樂は竟にまた享くべからざるか。嗚呼、彼の夢幻の靈光はそも



うつちにか逸し去りし今はそもうつちにある彼の夢幻の榮光は。▲末句 the glory and the dream は所謂ヘンダイヤチヌと稱する修辭の一法殆ど dreamy glory とはんほどの義を律呂風調の爲に態と引きはなし形容言たるべき語を名詞の如く物したるなり。△詞句風調の妙は一々に説くに及ばず訓釋を熟讀して諸子みづから玩味せよ。

第五解

V.

人の 生まるゝは 國よ(國土を)育まのち  
Our birth is but a sleep and a forgetting:  
人と共に昇る靈魂は かなはち 人の命の星は  
The soul that rises with us—our life's star—  
皆(れ)他國に其の没する處なきレカ  
Hath had elsewhere its setting,  
國よ(國土を)育まのち  
And cometh from afar;

Not in entire forgetfulness,

And not in utter nakedness,  
和(定)無なる靈魂を棄てし 人間は來たるなり  
全く睡りやふたれにさふカ

But trailing clouds of glory do we come  
天(空)の雲のやとより 人間の故郷なる(天(空)のやとより)

From God, who is our home:

上天人のつたはらにあり 人の(尙)いとけなきヤ  
Heaven lies about us in our infancy!

Shades of the prison-house begin to close  
牢獄の影を漸く閉ル

Upon the growing boy,  
成長する子の光を見

But he beholds the light, and whence it flows,  
又其の流むところをば(見る)

But he beholds the light,  
又其の流むところをば(見る)



(父)其の靈界中ニ生るる  
Hases it in his joy;

其の靈界中ニ生るる  
The youth, who daily farther from the east

其の靈界中ニ生るる  
Must travel, still is nature's priest,

其の靈界中ニ生るる  
And by the vision splendid

其の靈界中ニ生るる  
Is on his way attended;

其の靈界中ニ生るる  
At length the man perceives it die away,

其の靈界中ニ生るる  
And fade into the light of common day.

人の此の世に生まるゝは  
譬へば日輪の夜の明くると共に

眠りて過去を忘るゝのみ  
東山よりか々やきいつる如く

人の生まるゝと共に昇る靈魂は  
此のうつゝ世に昇りぬる前に  
而して其のうつゝ世に生まるゝや  
(さもあれ他界の生活を)

(將た他界の靈裝を)  
否(人間に生まるゝ折も)

老りへに牽きつゝ來たるなり、  
人間の故郷なる

夫れ人のいとけなきや、  
其の漸く長ずるや、

暗燻として四隅に薄る、  
往にし淨界の餘光を仰ぎ、

其が日々の娛しさに  
さて彼の青年も、

人の命の星ともいはん靈魂は  
他處に出没の地を有しき、  
はるけき方より來たるなり、

全く忘了して來たるにはあらず、  
全く剝ぎ去られて來たるにあらず、

他の燦爛たる雲の裳裾を  
天つ神のみもとより、

天つ神のみもとより。  
天上界は四邊に在り、

五濁に暗き牢獄の影  
而も尙わらはべは

其の照りいつる源を見て  
往にし樂土の影を見る。

(是非もなや)日と共に



次第々々に東方より

(流石に蒸染浅ければ)

彼の燦爛たる榮光は

尙其のゆくへに伴隨す。

竟に大人となる時は

たふとしと見し妙光も)

とほざかりゆく青年も、

いまだ自然の神官たり

彼のまばゆき幻は

(まばゆかりし幻の色あせて

平日の光と化す。

作者第四解を作して第五解を作せしめてには二星霜を経たりといふ隨うて第四と第五との間や、思想の聯絡せざるがごとき感なきにあらざ、故に或は難じて、急に過ぎたりといへり。要するに、ウオヅオスの眞意は、人間に前生あるを信じ、人の此の世に生まれて前生を記憶せざるは其の次第に五濁に蔽じて眞如の妙光に隔たるが爲に外ならず、さればこそ幼より老に至る間の經驗と感想とに徴するに、尤も幼なる時尤も深く自然に同感し、長ずるに隨うて次第に自然を悦ぶ念を減ずるなれ、よりて思ふに、人の生まるゝは譬へば睡眠より驚き醒むるが如し、其の前生を忘れはつるが爲に前生あるを信ぜざれど、其の實は前生無きにあらず、忘れた

るのみと。人間に前世ありといふ思想は、歐洲に在りては希臘のソクラテース、プレト、ピサゴラス等の唱道せし所、就中プレトの説は早くよりかなたの詩人に喜ばれて其の吟懐に影響せし所尠からず。其の説によれば人間の前生は天上の世界なり、今の人間の祖は天人にひとしかりしなり、今の人の常に理想の世界を想像して止まざるは、蓋し無意識の間に往にし天上界を追慕するなり、云々。ウオヅオスの本解中に謂へる前生説は、明かにプレトの旨に胚胎せるなり。  
▲はるけき方とは、天上界をいふ。 ▲造化の祭司、自然の神官、共に、自然的生活を敬愛する者といふ義。 ▲東方とは、日出の方、即ち天上界の意。

第六解

VI.

下土はたおのが特有のたのしみ品を(取りあつら)その前生に滿數す

Earth fills her lap with pleasures of her own;

彼れ勝たぬ樂の念を有す 其のよろこびにふれはしめ

Yearnings she has in her own natural kind,

ウオオノオオノオの持持解



母を以て敬ふは母の慈母の心なり

And, even with something of a mother's mind,

母を以て敬ふは母の心なり

And no unworthy aim,

(下土より)母の心はたゞ母の心なり 其の心の限りなき

The homely nurse doth all she can

母の心はたゞ母の心なり 其の心の限りなき

To make her foster-child, her inmate man,

母を以て敬ふは母の心なり

Forget the glories he has known,

母を以て敬ふは母の心なり

And that imperial palace whence he came.

(母を以て)敬ふは母の心なり

さすがに厭離すべきにあらざり、

此の娘(下土)はたゞ母の特有の

樂しき品の數をつくして

其の前垂に滿載す、

彼れ將た慈愛の念を有す。

下土てふ性にふさはしき

慈悲愛憐のこころはあるをや。

加ふるにいくらかは

まことの慈母の情さへあり、

剩へはづかしからぬ目的もあり、

里びたれども此の乳母、

下土と名に呼ぶ此のめのも、

彼れ將た力の限りを盡くし、

(そが上天よりあづかれる)

人間といふやしなひ子を

あのと共に棲みぬべき

下界の人となさんとて、

そが嘗て知れりし天上界の

かゝやく榮光を忘れさせ

來しかたの宿なりし

天上殿をも忘れしむ。

此の段は幼時の淨懷を遺失したるものが鬱悶を慰諭せんが爲に、下界のまかすがに厭離すべからざるをいふなり。一たび長じて後は、再び幼時の大悅樂を経験する能はずと雖も、成人にまた成人の悅樂あり、例へば、其の智の深遠となりゆくが如き是れなり、もとより彼の天上界のこよなき幸福には比ぶべくもあらねど、現世間將た樂しからざるにあらざり、云々。作者は此の意をうたはんと欲して、まづ上(即ち前生)を慈母に比し、下(即ち今生)を乳母に比し、彼れをみやびたる貴き婦人とし、此れを里びたるいやしき娘とす、又人をして其の前生を忘れしむるは、畢竟此の養



母が抱持せる頗るはづかしからざる目的に基くなりとす。如何なる目的ありて  
きかするかは、後々の解を讀めばちのづから明かなり。  
▲前垂に滿載す」とは村媪などが種々の果實などを前垂に盛りて見孫にわかち與  
ふるに思ひ寄せたる比喩なり。

第七卷

VII.

見よ彼のちやちやを 其は新町の参籠の陣に(衆した衆にやわたりた)  
Behold the child among his new-born blisses,

見よ六歳の次を彼の衣箱のふらふらと  
A six years' darling of a pigmy size!

見よ尸體を 其の赤黒の屍に群たせんと  
See, where 'mid work o. his own hand he lies,  
やる母はキキの慰撫に盡さざり  
Fretted by salls of his mother's kisses,

其の父の眼より来る光明を其にうつし  
With light upon him from his father's eyes!

見よ尸體をうつし 其の脚膝を其の足に  
See, at his feet, some little plan or chart,

そは入道の新羅の(茶なる)茶櫃に(茶つ)  
Some fragment from his dream of human life,

其の脚膝を其のうつしをなすやうに其のうつしを(畫に茶つ)  
Shaped by himself with newly-learned art;

其の茶つにうつしを其の茶つ  
A wedding or a festival,

其の茶つにうつしを其の茶つ  
A mourning or a funeral;

其の茶つにうつしを其の茶つ  
And this hath now his heart,

其の茶つにうつしを其の茶つ  
And unto this he frames his song:

其の茶つにうつしを其の茶つ



それは彼が其の舌を刺さしむるなり

Then will he hit his tongue

To dialogues of business, love, or strife;

而もそも久しからず

But it will not be long

抑も此に棄て給ふべし

Ere this be thrown aside,

わし世に棄て給ふべし

And with new joy and pride

The little actor cons another part;

彼は又其が十人十色の戯曲を充つべし

Filling from time to time his "humorous stage"

無稽の滑稽にあらん知べし

無稽なる滑稽に充つべし

With all the persons, down to palsied age,

人生が其の滑稽中に見えたる(滑稽せる老年に居るなり)

That life brings with her in her equipage;

其の装束の

As if his whole vocation

無稽の滑稽にあらん知べし

Were endless imitation.

見よ、をさなごの始めて此の世に生れいでし其の新福に圍繞せられていと  
楽しいげに嬉戯せるを。見よ、ピクミー程の大きさの童が嬉戯せるを。

此の段は無心無邪なる幼児の現世に生れいてたる初めを叙説す。▲「ピクミー」といふ語は希臘語よりいってたり。肘より手首までの長さをピクミーといふ、凡そ一尺三寸程なり、故にピクミーとは極めて矮小なる人種の稱ともなる、小人島人種といふことともなる。こゝにては小兒をいふなり。▲「六歳見」とあるはいたづら盛りのあちゆる小兒を指せるなれど、當時作者の念頭に特に存せりし一幼児あり、そは其の詩友コーンリッチが愛見ハートリー、コーンリッチなり。ウオヤチオスが他の小品に「To H. O.; Six Years Old」と題せる作り、そは特にハートリーの幼態を歌へ

ウオヤチオスの挿話時



るものなり。本節と照しおはせ見ば思ひなかげに過ぎぬべし。

見よや、其のをさなごが己が手細工物の間に横はりて遊べるを。その母が激しき接吻の跡はほのかに頬を飾り、其の父が慈眼の光りは常に其の身を照しつゝ。

▲ fretted と云ふ語こゝにては ornamented の意なり。▲ sallies は「突然と襲ふこと」の義。按ずるに、突然いだきしめて幾たびも「頬摺」することを目指すならん。其の頬摺(接吻)の跡薄桃色をなして美しといふ義か、或は fretted を besetted と釋して「母の接吻の突撃に攻め圍まれて」といふ程の比喩とせるもあり、之れも一釋なるべし。▲ 此の段は慈母と慈父とに掌上の珠とめていつくしまるゝをさなごが種々に玩具を取り散らし、ふと思ひつくまゝに手當り任せにたはいなき小細工を物して遊び居るさまを歌へるなり。

見よや、其のをさなごの足元には、小き圖案らしき者もあれば、繪圖らしきものもあり。いづれもをさなごが此の人生に關して想ひ浮べたる空想の断片なり。やゝ智慧づきて學び得たる小才覺もて、伴の空想の断片をば物の

形に造り成せるなり。

小見のやゝ智慧づくや、頗りに物真似をなし、小細工をよろこぶ。或は冠婚喪祭の真似ごとをなし、或は舞宴、或は旅行、或は建築、或は庭園、さまざまの物を模擬するなり。小き圖案のたぐひは建築若しくは庭園などの圖案なるべし。而して此等は皆小見が空想せる人生の片影なり。小見の人生知識の断片をばそが小技巧もて具形にせるなり。

結婚若しくは祝宴など、哀悼若しくは喪式など。

冠婚喪祭の真似は小見のまづ喜ぶ所なり。

さて今はかゝる真似事が彼れが心に叶へるゆゑ、小歌めく物を作りいたすも常にかゝる事に困めれど、やがてかゝる真似にも飽きて、或は商賣の問答をまねび、或は男女の情話を真似し、或は口論喧嘩の跡など、意の赴くまゝに口真似するに至りぬべし。

嗚呼、移り易きはをさな心かな。或時は冠婚喪祭の模擬をよろこび、小歌めく物を作りて口ずさみつゝ、冠婚喪祭の真似ごとをなせど、又忽ちに心移りて、こたひは商



人が顧客を迎へて賣買する折の口吻を眞似、又或は仔細らしくも情婦、情郎が口吻をまねびて、あまへは旦那さま、わたいは奥さまの稚態を演じ、又忽ちに一轉して、何だ、此の野郎の口輪句調を模擬す、云々。▲こゝに用ひたる how 及び gag は「或時は……或時は」の意に近し。

而もそれもまた久しからで、飽かれては抛棄られ、彼れは又新しき興に驅られて、さながら彼の俳優が種々の役目を演ずる如くに、此の幼き俳優も又新に工夫を凝らし、樂しげに、誇りがに、更に他の役目を演ずるに至る。

▲cons は「我々として意を注ぐ」といふ程の義。▲小兒が種々の人情、風俗を模倣し來たるさまを俳優の諸種の人物に扮するに喩ふ。

所謂「十人十色人さまざま」の劇壇を設置してありとあらゆる人物を件の劇壇に登らしめ來たる。幼より老に至る人間生涯の大行列の其の最後の陪從たる麻痺の老爺に至るまでも、皆是れ此の小優人が扮装し得て剩さるる所。

▲humorous stage とは「シークスピア、シェンソンなどいふヘリザメス朝の劇詩作者

の筆に見えたるごとき奇癖ある人物のいつる舞臺をいふ。humour の語今は滑稽と譯すれども、昔は「氣癖」などいふ意に用ひたり。我が江島屋、八文字屋などの作に所謂「形氣」といふ語に相當せり。即ち「一特癖ある可笑しき人物を humorous stage」といへり、隨うて humorous stage といへば「十人十色人さまざま」の形氣の奇人物輩出する舞臺といふことになるなり。▲小兒の人生を模倣するや、おのれと同年輩の幼兒よりはじめて、終にはよひくの老爺の態をすらも模するに至る。壯より衰に至るまでの人生の大行列、一として模倣せられざるはなし、云々。

其が全職のはてしなき模擬に存したらんやうに。小兒の模倣を力むるや甚し。さながら模倣をもておのが全職と思へらんが如し。

第八解

VIII.

汝(小兒)よ 其の外貌に其の無造作の

Thou, whose exterior semblance doth belie

ウオカシナオノスの好情時



Thy soul's immensity;

Thou best philosopher, who yet dost keep

Thy heritage; thou eye among the blind,

That, deaf and silent, read'st the eternal deep,

Haunted forever by the eternal mind,—

Mighty prophet! Seer blest!

On whom those truths do rest,

Which we are toiling all our lives to find;

In darkness lost, the darkness of the grave!

闇に迷つて 墓中の如き闇に迷つて(終生困々悶々する)  
 嗚呼、汝をさなごよ。其の無邪氣なる外貌の底に無邊際之靈性を包蔵せる  
 幼兒よ、嗚呼、汝は眞に無上賢哲なる哉。(他の人間は利慾名聞に蝕せられて  
 過去の淨懷を遺忘し去り、殆ど彼の天上界にて享有せりし其の良性を失ひ  
 たるに)今尙依然として其の先性を保續せる汝よ。嗚呼、汝は賢哲なる哉。  
 汝こそは群盲中の活眼と稱すべけれ。汝こそは、學ばずして、聞かざして、言  
 はずして、而も能く無窮甚深の天意をとこしなへに無窮の心が來往する  
 其の甚深の消息を解する者といふべけれ。嗚呼、かくの如く大眞理の宿り  
 住する汝の如き者は(小兒はまことに偉なる神仙かな、まことに幸ある豫言  
 者かな。我々世塵に染みたる輩が、いかで得てしがなく)と終生困々悶々  
 して、而も屢々闇にさまよひ、墳墓の底に墮ちたる如く、大闇黒に彷徨して得  
 がてにすなる大眞理の常に宿れる幼兒の身は。あなたふと、あな羨まし。  
 幼兒の無邪無心にしてものづから天意を達得し、不知不識にして無窮に來往せる



うつくしき口を極めて讃ゆるなり。

汝が頭上には汝が不死の靈性

Thou o'er whom thy immortality

日輪の如く永住す 猶主の奴に於ける(オキヤム)

Broods like the day, a master o'er a slave,

豈非てくまの如く照らす

A presence which is not to be put by;

(強き)汝(オキヤム) 汝がたまたまの汝が神の民に(オキヤム)

Thou little child, yet glorious in the might

天賦の自由を享けたる汝に榮光赫耀たる(オキヤム)

Of heaven-born freedom on thy being's height,

なまじなへに汝(オキヤム) 榮耀し來たる(オキヤム)

Why with such earnest pains dost thou provoke

嗚へんよわの榮耀を誘ふ(オキヤム) 嗚呼

The years to bring th' inevitable yoke,

(オキヤム) なまじなへにくまの如く照らす(オキヤム) 嗚呼

Thus blindly with thy blessedness at strife?

嗚呼汝が頭上には汝が不死無窮の靈性ながら大日輪の如く永住し照臨す。譬へば主の奴に君臨して其の進退を督するが如し。まことに除却すべからざる照臨なり、必然の關係なり。嗚呼汝小き見よ、汝はをさなければも榮譽赫耀たり。汝が當生は蓋し人生の極頂なり(無上無比の最美の境なり、最清淨の境遇なり、)天賦の自由の力によりて汝が身は小なるも榮譽は甚大なり。然るになどて日々に努めて、みづから日々に敢て努めて世の塵垢に染み來たるぞ。歳と共に淨懷の汚れ來たるは、所詮己みがたき所なるに、などて汝は自ら努めて次第に年齢を加へ來たるぞ。年を加へば利慾、名聞の桎梏は終に避くるに由なからん。など汝はかくの如くあるかにも、盲目にも、天賦の幸福と抗闘するぞや。

小兒の齡を加ふると共に、其の天性の美を失ひ、俗塵に染み來たるを慨するなり。

たまたまに汝が心も其の塵俗の負擔を得ん

Full soon thy soul shall have her earthly freight,

即ち世塵に其の心も塵俗の如く汝が心も其の負擔を得ん

And custom lie upon thee with a weight

オキヤムオキヤム



汝か上に横たはらん

Heavy as frost, and deep almost as life!

悲しむべきかなや、今こそあれ、やがて忽ち汝が淨き其の心もまぬかれがたき塵俗の負擔の爲に壓せられん、世人のすなる汚習悪俗はいましが心に積重して、其の重く除きがたきことは嚴冬の霜雪の重きが如く、其の深く透徹することは殆ど生命其のものゝ人生に深く貫透せるが如くならん。

作者が無邪を重んずること如何に深く、悪習俗を憎むこと如何に深きかを味ふべし。

第九解

IX.

あふ事は「や 我の愛戀の裡に

O joy! that in our embers

(愛) 愛戀の深き裡に

Is something that doth live,

世の無情は「や

That nature yet remembers

あふ事 愛戀の深き

What was so fugitive!

ふに世々の事を思ふは我が心の内に永々に恋しと思ふ心を離れ

The thought of our past years in me doth breed

あふ事

Perpetual benedictions: not, indeed,

彼の恋しと思はんに尤も相違せざるもの故にはあふや

For that which is most worthy to be bless'd;

彼の心なるが單純なる信仰願望即ち娛樂と自由との故にはあふや

Delight and liberty, the simple creed

ふにあふ事 時を休むる時を樂に(あふな事)其の願に

Of childhood, whether busy or at rest,

あふは幼少の時を忙しむる(あふな事)が單純なる(あふ)

With new-fledged hope still fluttering in his breast:

あふ喜ばしや、我々人間が幼き時の淨懷は既に殆ど燃え盡きぬれども、尚ほ

ウキキスチキスの抒情詩







深遠と抱けりし疑念の爲に

Moving about in worlds not realized,

高尚なる天性の爲に 其の前に行つる時は我々人間の肉性が

High instincts, before which our mortal nature

罪を犯せる者の如く愕然として震ひものゝく(高尚なる天性の爲に)

Did tremble like a guilty thing surprised!

然り、これら幼時のあどけなき信條の爲に讃歎感謝するにあらず、否、下に謂ふ諸種の想念の幼時に存せりしを感謝するなり。所謂諸種の想念とは、彼の我が五官をもて感覺する所を現に在る物とは信じ得ずして、かた意地にも之れを疑ひ、すべての外物を夢、幻の如く疑ひ思ひし其の心、樹木墾障の如きをすら現實には在らぬ物と疑ひ、握りて見つ、觸れて見つ、時には恍として此等の物の我れを離れ去るかと思ひ、見る／＼消え去るかと思せし心、其の他あらゆる世界を空虚なる幻影と疑ひ、そこに動ける動物をも幻象ならんと疑ひし其の心、また彼の天成のいみじき本能、卑近を憎み高遠を愛し、かりそめにもいやしき目前の樂欲に感溺せざらんとする高雅の天性、此の天性

に對しては、現在にのみ拘泥する人のいやしき肉性は、さながら大罪を犯せる者の如く自然にして愕きおのゝく、これら高尚なる諸想念の爲に、予はそ

いろにも感謝するなり。  
此の段は、此の長歌のはしがきに譯しおきし著者が自白を参照して、真意の在る所をさとるべし。蓋し、我々人間の耳目に觸るゝ所の萬物は畢竟するに幻影たるに外ならず、即ち空虚なる現象たるのみ、不死不滅にして萬古不易なるは此等現象を作りいだす心靈の外にはあらず、即ち一切萬物は悉皆是れ心靈の所造云々とは著者が幼時に疑ひ思ひし所長じて、プレトリー等の學説を知りていよ／＼信ぜんと欲する所。ウオオゾオオス思へらく、學説にすがりてはじめて靈魂の常住を知り、若しくは萬物の幻象たるを疑はんか、是れ恐らくは妄想ならんが無邪清淨なりしをさなごゝろに自然にして萬物の實在を疑ふは、是れ豈天の我れに告げさせたまふにあらずや。學ぶ所なくしておのづから知る心靈の眞に靈なるを知るべきにあらずや。これ豈人の心靈の無窮に來往する證にあらずやと。



和、（その時々の情念の故に）  
But for those first affections,

（その時々の情念の故に）  
Those shadowy recollections,

（その時々の情念の故に）  
Which, be they what they may,

（我が心一切の大光明の源泉なり）

Are yet the fountain light of all our day,

（我が心一切の大光明）

Are yet u master light of all our seeing;

（我々が心を保持し操縦して操縦する幾十年々々々々）

Uphold us, cherish, and have power to make

（永劫無窮なる大沈黙の存在中に於ける種々群衆那たらしむる力あり）

Our noisy years seem moments in the being

（オレ達の人生なり）

Of the eternal silence; truths that wake,

（我々の心は永遠なる）

To perish never;

（不滅の情念の故に）

Which neither listlessness, nor mad endeavour,

（大人の力も小児の力も）

Nor man nor boy,

（我々の心の総動たる如何なるものも来たること）

Nor all that is at enmity with joy,

（我々の心を全滅する能はず時た全滅する能はず）

Can utterly abolish or destroy!

否々前にもいへる如く、予が深く感謝するは件の想念の爲にこそ、これらを  
さなき折柄の自然のいみじき想念を忝しとは思ふなれ、これら臚に想起せ  
らるゝ往時の想念をよろこぶなれ。そもくこれらの想念は、夢に似たり  
とも、まぼろしに似たりとも、如何なるものにあらんとも、兎も角も、此の想念  
こそは、我々人生の一切を照らす大光明の源泉なれ、我々人間が心の眼に其



の指すかたを知らしむることよなき炬光とも見なすべきなれ。然り、これら  
 想念こそは、我々人間が加よわき心をさへ扶け擁護し、撫育し、騷然又擾然  
 たる憂き事繁き年々をも、夢まぼろしと思はしめ、永劫無窮の大沈黙的生活  
 の別に嚴として存在することを悟らしめ、其の大生活にくらぶれば、人生五  
 十の春秋は僅々數刹那に外ならずと大悟せしむる力あり。然り、これらの  
 想念こそは萬古不易の真理なれ、常に生存し、常に起坐し、曾て死すること無  
 き真理なれ。此の想念や、此の真理や、何者か能く之れを滅せん。不注意怠  
 慢も之れを滅ぼす能はず。狂氣めく努力をもて之れを滅ぼさんと試るも  
 能ふまじ、大人の力も、小見の力も決して之れを滅ぼす能はず。樂しき事の  
 怨敵たる禍も、悲しみも、悵鬱も、辛苦も、人間一切の凶災もいかてか之れを全  
 廢し得ん、いかてか之れを全滅し得ん。

一切萬物は心靈の所造と疑ひ思ひたる想念を争ふべからざる真理と思惟し、心靈  
 の不死不滅は此の想念によりて斷信し得べしと思へるゆゑ、深く此の想念をたふ  
 とめる也。▲ uphold, cherish, have power 等は affections 及び之れと格を同うせる recol-

lections を主とす。即ち三行前なる which の動詞なり。▲ truths も affections 及び  
 recollections と同格隨うて末の which は truths の代詞としつゝも affections 等の代詞とし  
 つゝも、これともちつつかくなし。▲ eternal silence は不死不滅、不言不語の心靈をい  
 ふ。

ちるる故に 静のよなる静寂なり

Hence, in a season of calm weather,

よの静寂に在るに在る

Though inland far we be,

我々の心界は 彼の不死不滅の海を見

Our souls have sight of that immortal sea

ソノ心我々をこゝに(海を見る)

which brought us hither;

たは我々をこゝに旅しつゝ

Can in a moment travel thither,——

彼處に瞬間に往くべし

And see the children sport upon the shore,

かたはちソノ岸の児童遊



とこしなへに巻き返る大なる海の聲をも聞く

And hear the mighty waters rolling evermore.

かるが故に、年老い來たる今日だに、幸ひに空長閑なる季節には、心虚平にして名利の念鬱勃たらざる時には、よしや遙かなる内地に在るもよしや清淨無垢なりし幼年の時代を離るゝと遠しと雖も、今尙髣髴として我々を此の現世にゐるて來にし其の永劫の波濤を見る、肉眼にこそは得見され、我が心の眼には常住不壞の淨樂境、今尙ほのかに見らるゝ也、かゝる淨念の浮べる時には、我が心窃窕としていつしか汚き現世を離れ、忽然として一刹那に、來しかたの海に旅しゆきて、伴の海の岸邊に遊ぶ無邪氣の兒の影をも見、また永久に巻き返す永劫海の大濤の高く偉いなる聲をも聞く。

幼時の淨懷を追想し、幼時の疑惑を回憶すれば、靈魂不死の眞理は照々乎として火を睹るが如し。苟も心平にして虚ならんか、今尙過去の追想は禁せんと欲して禁ずること能はざらん。我が心如何に淨境に遠ざかりたるも、時としては心眼髣髴として前生を見、忽ちにして前生に還り、無垢の小兒と共に遊び神秘高大の天樂を

聞く。△原詞を熟讀して、比喩の幽遠と辭の莊嚴とを玩味せよ。

第十解

X.

わらひ歌くら 汝衆あや 歌へ樂しき歌をうたうて

Then, sing, ye birds, sing, sing a joyous song!

ぞれなや群の中をこり舞ふじらや

And let the young lambs bound

群の背にのびての舞へど

As to the tabor's sound!

やがてよばりし心こしては汝等がむねに合聲やん

We, in thought, will join your throng,

我らが心よ汝等や 衆はたはるん衆等や

Ye that pipe and ye that play,

ちの聲響の吹笛やカサの

Ye that through your hearts to-day

心の中をこりては



花の喜びを喜びの故に  
Feel the gladness of the May!

其のむかし赫耀たりし光明の

What though the radiance which was once so bright

今もかくに我は目よみ今猶ほかくに我は心もよみ

Be now forever taken from my sight,

花に天光を見る時を 花に夜光を見る時を

Though nothing can bring back the hour

あはれ時なだかくよも世もなだかく

Of splendor in the grass, of glory in the flower;

やを我々ばななる草もくま 花もくま

We will grieve not, rather find

そとくに憂むる時にかんじ力なきをばくま

Strength in what remains behind,

後の本其の回路に(大草を見つたやと)

In the primal sympathy

彼の回路や一たの草をくまからば花に存在くまをくま  
which having been, must ever be;

(又)人間の痛苦の心なれ

In the soothing thoughts that spring

春の心よの心よをさぐる思惟に於て

Out of human suffering;

(又)死後まよへも洞観する信仰に於て

In the faith that looks through death,

(又)冥明なる思慮をよめる年々に於て

In years that bring the philosophic mind.

既に靈魂の不死を悟り、人生を頼もしと知るからは、何を苦しみてか徒らに  
惆悵として懊惱たらんや、されば歌へや諸鳥よ、歌へ、樂しき歌を歌ひてをさ  
なき羊の子等をして、鼓につれて踊るが如くに、勇ましく跳躍せしめよ、我が  
ともがらも、いでやいで、身こそは老いたれ、心ほどはいかて汝等に劣るべき  
いざ諸共に舞ひ歌はん。笛吹き歌ふ汝等よ、遊びたはるゝ汝等よ。時しも  
春の樂しさを盗るゝばかりに胸にたゝへて、戯れ遊ぶ汝等よ。我れも浮れ

ウオルト・マックスの抒情詩



て諸ともに、いざや歌はん、いざ舞はん。嗚呼其のむかし幼き折に赫耀たりし光明の、今は影なく消え去りて、今は早やとこしなへに、我が眼に見ること能はざれど、今は早や幼時とちがひ、草を見ても淨境の影を志のひ花を見ても天上界を想像し、毎に妙光に接觸する至幸の境界にはあらざれども、嗚呼、何かあらん、返らぬ事は歎かざるべし。否むしろ今も尙後に遺れる天賜あり、其の遺存せる天賜にこそ我が力草を求むべけれ。夫れ彼の本具の同感は(外物と自己との間に自然に成りたてる同感は)人間本具の性にして、現に一たび存せしからは、常に存してあるべきなり。他と我れとは共に不滅の心靈也、他は我れなり、我れは他なり、我他彼此の別無しと相同感する心あるは、豈いみじき力草ならずや、又人の世に苦海といへど、其の辛酸のうちよりこそ人の心を安愉する慰めぐさの涌きいづれ。又みまかりし後までも洞觀し得て安立すなる其の信仰をこそ頼みとせめ。又年毎に加はりゆく賢き智慧をこそ頼みとせめ。

▲人間の艱苦のうちより自から涌きいづる慰藉に於てとは、大艱苦、大辛酸は適

以て人をして大悟せしむる縁也。塵慾のはかなきを知り、肉の樂みの暫且なるを悟り、やがて正覺に赴くべき縁となる也。ほゞ佛敎の思想に同じ。▲幼時の淨懷を失ひしは可惜しけれど、本具の同感の日々に長じ、安心立命の縁の日々に加はり、不死を悟り得て泰然たる確たる信仰の日々に定まり、春秋と共に悟道の進みゆくは頼もしとなり。

第十一解

XI.

あはれなれば安んずる石泉よ、牧場よ、丘よ、森林よ

And oh ye fountains, meadows, hills, and groves,

我々がまつゝるの相群く、いさよんしとは夢にたに思ふなり

Forebode not any severing of our loves!

今も尙我が心の底には、いさよんしが力なまはゆるなり

Yet in my heart of hearts I feel your might;

我が心の一の底に安んずる(聖は)は)

I only have relinquisht one delight,

サオオオオオオオの神聖



更に常に汝等が勢力の下に生活をせざるのみ  
To live beneath your more habitual sway.

あはれ、さらば、汝をちこちの泉野、山林よ、とこしなへに我が友たれ、汝を愛する我が心は今もいにしへに異なることなし、我れと汝等と相畔くことあるべしとは夢にだに思ふなかれ。うはへこそはあれ、我が心の底は今も尙舊の如し、汝等が我れを動かす力はた舊の如し、我れは依然として汝等が感動力の偉いなるをちぼゆるなり、蓋し、我が年波の寄するにつれて、まばらく汝等を棄てたるは、我が唯一の悦樂たる汝等とまばし相隔たりしは、畢竟、人生の苦味を味ひ、彼れの苦と汝の甘とを對照し、ますます汝等の美なることを知り、幼時にもいやますばかりに、常に汝等の勢力を深く鋭く感じ得んが爲なるのみ、決して汝等を棄てたるにあらず。

予は今も尙愛するなり 岩に激して流れ下るをちこちの小川ともな

I love the brooks which down their channels fret,

其の水の輕きが如く騒ぐもの、に飛び走りしなまなき折にも勝るばかりに

Even more than when I tripp'd lightly as they!

又新しき朝陽の其の活潑なる光明。

The innocent brightness of a new-born day

今尙依然として可憐なり

Is lovely yet;

又夕陽の周圍に集まる(其の美しき)虹の雲

The clouds that gather round the setting sun

浮世の榮枯盛衰を觀察せりし目もて見れば

Do take a sober colouring from an eye

(昔しは絶えて見るを得ざりし)嚴肅なる色彩を帯び來たる

That hath kept watch o'er man's mortality;

今も尙自然の風物は、予の切に愛する所、岩に激して流れ下る清き小川のうつくしきは我れ今も尙愛するなり。其の川の水の輕きが如く、あなたこなたと飛び走りて、山野に遊びし幼年の、其の折にすら勝るばかりに、又東山にさし昇る朝日の光りの美しさは、我れ今見てもいとめでたし。又夕陽を圍繞する金色燦爛たるむら雲も、浮世の榮枯成敗を觀察したりし目もて觀れば、一種別様の趣きありて無常轉變の理を悟得せしむる媒なり。



更に走りくらへて更に霞を得たるなり

Another race hath been, and other palms are won.

あはれかた下けなきは人の心なり人情は生活のまじな也

Thanks to the human heart by which we live;

かた下けなきは慈悲、悦楽、畏怖の念なり

Thanks to its tenderness, its joys, and fears;

我々に取りては咲き、いぶること後まじき野花にたも

To me the meanest flower that blows can give

涙をもて發表するには餘りに甚深なる物思ひを起さしむ

Thoughts that do often lie too deep for tears.

▲更に走りくらへして云々とは、浮世の辛酸を経たればこそかく新たに自然の美  
を感じるを得るなれ、同生涯をついけたらば、此の甚深感を得る能はざりしならん  
の意。▲畢竟天然の眞美を悟るは、或は愛し、或は樂み、或は怖れ、辛酸甘苦さまじ  
の世味を味ひたればこそなれ、さすれば感謝すべきは人間のもたる情の恩也。今  
や我れ種々の辛酸を経たる甲斐に、區々たる野花を詠めてだにかゝる甚深の感と

なす。涙をもて發表し得るは尙感の甚深ならざるものなり、涙に表出する能はさ  
る程の情思浮ぶ、是れ情思の至切なるものなり、往にし清淨の世界を想ひ、靈魂の不  
死をも悟る、是れ皆悲喜に鍛へ來し人情の賜なり、云々。



## 評釋の七

## シェイクスピアの劇詩

シェイクスピアの作と稱せられたる脚本あまたあるなかに確かに彼れが作なりと認められたるはおよそ三十六篇に過ぎず。これらは一千五百八十八年(作者二十四歳の時)より同六百十三年までの作なり。然るに作者シェイクスピアは一千五百六十四年に生まれて同六百十六年五十二歳にてみまかりぬれば、絶筆は四十八九歳の折なりしなるべく、隨うて其の著作期はおよそ二十五年なり、そを其の作に現れたる技倆結構着想等の異同を元として大別すれば四期となる。第一期は作者が修行期ともいふべき時にて、即ち諷刺諧謔を主としたる喜劇及び『ロミオアンドジュリエット』といふ悲劇とを作りし時代也。第二期は史劇と快活なる喜劇とを作りし時代、さて其の三期は深刻なる悲劇とも、もて、快活にしてうら、嚴酷なる喜劇とを作りし時代、さてまた其の四期は沈靜嚴肅にして而も優美爽快なる悲喜混交の劇を作りし時代なり。彼れが著作は此の四期に於て著き異同あり、着想の優劣



はいふまでもなく、文章、結構にも著き差違あり。此の故にシェイクスピアを知らんと欲すれば、尠くとも此の四期に就きて一二篇宛は讀まざるを得ず。例へば第一期の代表としては彼れが處女作とみづから稱せし『ギーンナス、アンド、アドニス』といふ叙事の詩、兼ねては『ロミオ、アンド、ジュリエット』など。第二期の代表としては『キング、ジョン』、『ヘンリー、四世』、『リチャード、三世』など、並びに『マアチャント、オフ、エニス』など。第三期の代表には所謂四大悲劇、『ハムレット』、『マクベス』、『キング、リヤ』、『オセロ』など。第四期の代表期には『テムベスト』、『ウインタアス、テール』など。

シェイクスピア研究の方法よりいへば第一期、第二期と順序を追うて評釋するかた穩當なるべきが、爰には態と第三期の作を擇びたり。蓋し第一期の作には所謂懸け、ことば、詰呂、口合等多ければ、解釋最も、やゝこしく、よし釋し得て巧なるも能くは會得せらるまじき故なり。さて又第二期の作も喜劇をさて置きていへば、英國史に疎き人には興味甚だ深からず、且つは歴史上の管々しき註釋を加へんもうるさし。加之、技倆も着想も第三期のに劣りたり。所詮本評釋の主旨はシェイクスピアの作意、文脈等の片影を其の一作の幾齣のみによりて示さんとするにあれば、成るべく

は傑れたるを取るかた寧ろ至當なるべしとて、遂に四大悲劇の隨一なる『マクベス』をえらぶこととせざるなり。

マクベス

Macbeth.

此の作脱稿の年月に關しては種々異説あれど、假に一千六百〇六年といふを正しとすべし、讀者は此の作をもて作者が全盛の時の作と思へば足れり。

此の作の材料は作者と同時代の史家、ホリンドン、シマドといふが著し、蘇國の歴史よりいてたり。人物の姓名も、事實の大跡も、すべて彼れによれるなり。もと件の蘇國史は正史よりは野史に近くて、我が『太平記』などに似たるものなるを、作者がところく、ぬきとり、つなぎあはせ、更にまた潤色したるなれば、事實はいふに及ばず、主人公と立てたるマクベスの性質も正史のとは同じからず。活歴史といふことを史劇の本意なりとせば、シェイクスピアの如きも、太く脚本の本領を誤りたる作者の



一人なるべし。

此の作の敷場の中なる幾十節はシェイクスピアが筆ならずといふ説あり。云々の句より云々の句までは他の作者ミッドルトンといふが挿入せしなりなど、明かに指摘せし學者もあり。此の事シェイクスピア研究の爲には大切の件なれど、入門釋義には必要とも思はれず、此の故に言はて叶はぬ分の外は皆省くことゝすべし。シェイクスピアの臺帳は我が國のところがひ、床の淨瑠璃といふものもなく、明細なる道具立書割若しくは衣裳の詠へ等もなし。唯大體の場割とおよその舞臺面を示せるのみ、又人物の科介、思入れ等も、たまさかに大要をかき入れたるのみ、詳しくきとは無し、此の釋には種々管々しきことを書き入れたれど、それらは本文になきものと知るべし。

シェイクスピアのも、作によりては、ほと／＼幕毎に開場詞の附きたるもまた末に閉場詞のつきたるもあれど、此の作には無し。

DRAMATIS PERSONAE.

|                                                |                                                  |
|------------------------------------------------|--------------------------------------------------|
| DUNCAN, King of Scotland.                      | Young SIWARD, his Son.                           |
| MALCOLM,                                       | SEYTON, an Officer attending on Macbeth.         |
| DONALDIN,                                      | Boy, son to Macduff.                             |
| MAOETH,                                        | An English Doctor.                               |
| BANQUO,                                        | A Scotch Doctor.                                 |
| MAODUFF,                                       | A Soldier.                                       |
| LENNOX,                                        | A Porter.                                        |
| ROSS,                                          | An Old Man.                                      |
| MENTEITH,                                      | LADY MAOETH.                                     |
| ANGUS,                                         | Gentlewoman attending on Lady Macbeth.           |
| CATTINNESS,                                    | HEATE, and three Witches.                        |
| FRANCO, Son to Banquo.                         | Lords, Gentlemen, Officers, Soldiers, Murderers, |
| SIWARD, Earl of Northumberland, General of the | Attendants, and Messengers.                      |
| English Forces.                                | The Ghost of Banquo, and other Apparitions.      |

SCENE—In the end of the Fourth Act in ENGLAND: through the rest of the Play, in SCOTLAND.



登場人物

蘇國王  
ダンカン  
同 長子  
マルコム  
同 次子  
ドナルベイン  
蘇國の將軍  
マクベス  
同  
パンコー  
貴 紳  
マクダフ  
同  
レンノックス  
同  
ロス

貴 紳  
メンテイス  
同  
アングラス  
同  
ケイスチス  
マンゴリー子  
フリヤンス  
英軍の將(ノサムブランド伯)  
シワード  
同 一子  
少シワード  
マクベス近臣  
セイトソン

マクダフの男(少童)  
英廷の侍醫一人  
蘇廷の侍醫一人  
兵卒一人  
門番の男一人  
老翁一人  
マクベス夫人  
マクダフ夫人  
マクダフ夫人の侍女一人  
女魔並に三妖婆  
貴紳、官人、武士、刺客、従臣、使者、  
數十人  
マンゴリーの魔並に其の他の妖怪

場處——第四段の末段は英國其の他はすべて蘇國

ACT I.

SCENE I.—An Open Place.

Thunder and lightning. Enter three Witches.

第一 段

第一場 野外

雷鳴電光 三妖婆登場

Act の原義「動作」、Scene の原義「景」なり、こゝには意譯を掲げたり。此の二語シー・ク  
スピヤの作にては、右の如く意譯しても、若しくは Act を「幕」若しくは「套」、Scene を「齣」  
と譯してもよけれど、Scene は必ずしも場、若しくは齣と譯しがたき場合他の脚本  
にはあり。例へば佛の喜劇などに見えたる Scene はむしろ景、又は舞臺面と譯す  
べきものなり。何となれば、登場の人物が増減する毎に舞臺面の變換するを第一  
景、第二景と名づければなり。若し、獨舞臺を第一景とすれば、申上げます云々とい  
ひながら侍士のいて来て問答するは第二景なり。さて此の侍士去りてまた獨舞

シェークスピヤの劇詩



臺となれば第三景となるなり、餘は之れに準ず、されば時としては一幕中に數十景を含めることあり。シェークスピアにはさること絶えて無し、彼れが Scene と名づけたるは殆ど我が場と同じものなり。

舞臺の構造當時はなほだ粗末なりしかば、道具立、畫割なども總て當場のちもむきをほのめかすに過ぎざりき。或は荆棘の小枝をこゝかしこにさしはさみて深林の有様を知らしめ、或は小石五つ六つ散らし置きて濱邊なる由をきかせたることもあり。爰は何村、何町など、札に書きて舞臺に掲げたることもありきとぞ。我が能狂言の舞臺面に似たりき。餘事ながら我が國今日の舞臺は道具立の大げふなること趣向こそ異なりたれ、西洋今日の譲るべしとも思はれず、むしろ本式に棟柱などを釘附にする所よりいへば彼れよりも贅澤なりと評すべし、是れ或は將來にシェークスピア風の作を出だすことを妨ぐべき一因縁とはならずや、道具だてを頼む心が作者の念頭を離るまじきゆゑなり。シェークスピアの作を見るに善美悉く其の作の詞句、人物が科白シヤウバの間にあり、彼れは眼に訴ふることよりも心に訴ふることを専とせしこと明かなり。或は彼れは道具立等の粗略にて依頼しがたき

を知りし故に、自然全力を人物の上に致し、にやあらん。兎に角、道具立などを離れても趣味深きがまことのドラマなるべし。

野外とあるは舞臺面のちほよそを眺へたるなり、版によりては「荒野」と記したるもあり。雷鳴、電光とあるも眺への道具、鳴物なり。三妖姿とあるは我が國の「いづな使ひ」などやうの老婆なり。登場とは妖婆の三人連れ立ちて場に入るをいふ。

シェークスピアの作にては、幕あきて後人物の登場すること十中八九の例なり、又一場果つる毎に出場の人物悉く立ち去るを十中八九の例とす、いづれも直に舞臺面を換ふるに便宜なれば斯くしたりしならん。勿論登場、退場ともにシラセ無く、床の淨瑠璃も無し、我が國の劇を觀慣れたる目には随分間の抜けたるものなり。

此の劇の大筋は、蘇の王族マクベスがはじめは無二の忠臣なりしが、中ごろ逆心を生じて其の君ダンヌン王を弑し、奸計をもて巧に弑逆の跡をくらまし、首尾よく國王の位に登りてまばらくは榮華に誇りたりしも、終にダンカンの王子マルコムを爲に誅戮せらるゝに至るといふ筋なり。第一段のはじめの趣はマクベスがダンカン王の勅命を蒙りてバンコーといふ將軍と共に、西方群島の領主マクドナルド



が謀叛したるを征伐し、勝利を得て凱旋する由を妖婆が妖術によりて早くも豫知し、途中に待ちうけて魔道に誘はんと試むといふ筋立なり。妖婆が人を魔界におとすといふことは當時の謬信にて、シェイクスピア時代の脚本若しくは小説類などには聞か見えたり。

第一場の當頭に雷といろき稲妻ひらめく物すごき有様を見せて三妖婆をあらはしたるは、此の黯慘たる悲劇の發端たるにいとよく叶ひたり。案ずるに、第一場は妖婆等が已に魔法を修しはてし將に立ち別かれんとする所なるべし。我が劇なりせば爰は後ろ黒幕などなるべければ、三妖婆の場を退くと共に幕を落とし、第二場陣營の場となるべき者ならん。そもく道義の日輪漸没して主人公マクベス罪惡の奈落に墜つるといふが此の劇の要點なれば、序幕に小暗き夕方の景色を點出したること暗に主觀的斜陽をも示すに似て面白し。

1 Witch. When shall we three meet again,

In thunder, lightning, or in rain?

甲妖婆 またも三人が會はん日はいつぞ雷鳴りひかりて雨ふる最中に。

此の一齣は悉く韻話より成りたれど、風調の美は移しがたし。總じて作者は嚴肅高雅、沈痛等の場合をはじめとして、ちよそ重要なる限りは、律語を用ひたり。韻を押したるは、特に優雅なる場合か、嚴肅なる場合也、尤も此れも彼の四期によりて相違あり。妖婆は卑しきものにはあれど、爰に「はいと嚴に宣せたり。」▲末句の or 或は and と書き做せり、故に譯文は and の義に釋したり。

2 Witch. When the hurley-burley's done,

When the battle's lost and won.

乙妖婆 彼の騒動の終はらん折に彼の勝敗のきまらん折に

▲彼の騒動とは官軍と叛徒との鬪戦をいふ。勝敗云々とあるも同じ。句拍子と音律の都合とによりて斯くは重ねたるなり。▲hurley-burley といふ語其の發音の中にものづから動擾の義を現す。

3. Witch. That will be ere the set of sun.

丙妖婆 それぞ夕日の沈まぬころ。

1. Witch. Where the place?

マクベスの劇



甲妖婆 さて其の場處は。

マクベスに出逢ふべき場處を問ふ。先づ時を問ひ次に處を問ふ。

2 *Witch.* Upon the heath

乙妖婆 いつもの野へにて。

▲ *heath* は荒れ果てたる岡なり。妖婆等の如き化生の物の屢々ゆきしする處と見えれば意を酌みて「いつもの」と釋しつ。今も其の地なるべしと信ぜられたる處蘇國にありて物凄き場處なりと云々。

3 *Witch.* There to meet with Macbeth.

丙妖婆 かしこにてマクベスを俟ちあはさん。

原文には「其處にてマクベスにあはんずため」とあり。されど此のあたり張音の數不足して韻律の少しく亂れたるを思へば原文に二三音の脱落あるにやとも思はる。先聲既に「侯(即ち thane)」といふ一語を挿入れて張音の不足を補はんとせり、又或註釋家は此の白の前へシテまたたれにあはん爲ぞ」といふ意味にて *whom* とし、ふ語を挿入して丙妖婆の白をば其の答の如く作りなせり、そは *when, where, whom,*

と三問にもてなさんとなり。爰には諸釋を參酌して前文の如く譯しつ。

さて此のトタンに彼方にて妖猫の啼く聲すと思ふべし。此の猫は妖婆が使役せる怪獸なり。鼠色の猫を「グレイマルキン」又は「クリマルキン」といふ。啼くは其の主を呼ぶなり。

1 *Witch.* I come, Graymalkin.

甲妖婆 カ、今參る、クリマルキン。

2 *Witch.* Paddock calls.

乙妖婆 マレ、猫が呼うてゐる。

▲「猫」も亦使役せらるゝ動物なり。此の猫は丙妖婆の使ふと見えたり

3 *Witch.* Anon!

丙妖婆 やんがう。

これにて三人打連れ立ちて去らんとす、乃ち諸共に左の句を唱す。

*All.* Fair is foul and foul is fair;

Hover through the fog and filthy air.

[*exunt.*]

マクベスと妖婆の隠微